

国際交流ボランティアのライフコース — 個人のライフコースと外国人交流歴との関連 —

竹田 美知

はじめに

筆者は、大学生を対象として、若者の在日外国人に対する認識を、外国人交流頻度、外国人のイメージ、外国人の人権への配慮などに関してアンケート調査を行った。その結果、外国人との交流頻度は少なく若者が外国人に対して抱くイメージは実際の交流体験から得られたものではなく、小学校中・高学年に聞いた家族の風評に大きく影響を受けて形成されていることが確認された。このような実際の交流がないまま抱かれた外国人イメージは、外国人がおかれている社会状況やマイノリティとしての位置付けられた力関係に関しても情報が乏しいままで、外国人の人権に対しても目が向けられていない。

本報告は、第1に国際交流団体でボランティアとして活動している若者の実態をとらえる。第2にこのような外国人との活発な交流を生み出した要因を探る。どのようなきっかけで外国人と交流するようになったか、家族の外国人に対する考えはどのようなものであったか、これまでに受けてきた外国人に対する人権教育はどのようなものであったかを、インタビュー調査によって明らかにする。また第3に国際交流ボランティアで活動している若者自身の移動歴や学歴、職歴などのライフコースが、どのような価値観をはぐくみ、友人ネットワークを作り出し、外国人との交流というボランティアへ向かって行くかをライフコース分析によって明らかにする。

分析枠組み

篠田が「基本的に、日本の社会はどちらかといえばスタティックな社会であるのに対して、ヨーロッパの社会はダイナミックな社会であるということがある」。「巡礼の構図, 1991, 山折他, p204」というように日本社会は定住を前提とし、バイキングや華僑のように外に向かって進出したり、外から大量の移民を受け入れたりすることは少なかった。日本人は定住して所属する集団のメンバーとして、集団の規範に深く帰依し自分自身のアイデンティティーをも深く所属集団と結びつけていると言われて久しい。そのような日本人が異文化を運んでくる外国人、特に定住を前提としない一時的移住によって日本国内に在住する外国人に対して、ある種の不安を抱いたり、『距離感』を持つことを日本人の特質と

して捕らえられることもあった。『島国根性』とか、『井の中の蛙』といったような言葉で日本人らしさを表現する者もある。しかしこのように『定住』に執着するあまり『移動』してくる人々に関して緊張と不安を経験するばかりか、自分自身が『移動』することに関しても非積極的になることを日本人の特質として語っていいのだろうか。

最近、若者による四国遍路やアジアへの無銭旅行が新たなブームを引き起こしていると言われている。人生の転機に『巡礼』すなわち巡り歩くことによって新たな人や知識との出会いを経験したいという欲望は、どのような人生を送っている人にもあるのではないだろうか。むしろこれまでの人生が一つの目標に縛られ、単純の道筋が描かれ競走に明け暮れてきた者ほど、その目標からの拘束を逃れたいという欲望は強くなるのではないだろうか。青木によると、巡礼には二つの意味があると言う。

「巡礼には、いろいろな意味があるでしょうが、まず第1に身体をつかって移動するということだとおもいます。そこで二つの点で議論をすすめたらどうかとおもうのですが。一つは、実際に、歩くと言うことの意味、しかも日常の外側に出て行くということ、そこから巡礼ということの意味をみつきたい。もう一つは、現在ではいろいろな巡礼の仕方がありますが、身体的苦行を基本とするという側面です。つまり歩くこと、体を動かすこと、ある種の苦しさというものをとおして何かを達成していくということです。そこで巡礼において最初の意味があるのは歩くことであって、巡礼の身体性、すなわち身体的、肉体的側面というものをどう考えるのかということになる。そういう身体的苦行をとおして何をするのかということ、知識を獲得する、あるいは何ごとかと知るので。この場合、知ると言う行為は、通常の知識、日常的な知識の外側にある知識の獲得であって、日常を超える知識を得ることです。普通の学校だとか日常の生活の内側で得ることのできない知識を獲得するために巡礼に行く。そのために身体的苦行を経験するという。知識と経験という問題が巡礼にはつねにつきまわってきます。」〔巡礼の構図、1991、山折他、p 74〕

狭い世間からのプレッシャーに押しつぶされそうになった時、学歴のみに一元化された価値観に疑問を感じた時、職場において仕事への忠誠のため自分自身の価値観が犠牲にならざるを得なかったりした時、自分自身がこれからどのように生きるか迷った時、現代における巡礼は大きな意味を持つてくる。特に青年期には社会の一員としての役割が期待され地位と役割に大きな変化が生じる時代であり、人生の転機と感ずる人も多い。かつては通過儀礼という明確な形で大人への仲間入りが自他ともに確認できたが、今日では子どもと大人の境界が不明確になるにつれ、自分自身に巡礼を科すことによって、自分自身のアイデンティティーを確認すること考えられる。このように考えてくると、人生の岐路である決断を迫られた時、これまで経験してきた集団の文化、価値観を見なおしてその枠組みから解放されたい、異質の文化と交流したいという気持ちが高くなると思われる。そういう気

持ちが、『巡礼』という形で自分自身が旅にでることに繋がったり、外国人交流への原動力になったりするのではないだろうか。

このように考えてくると、日本人の特性として定点に定着して異文化に対して不安や緊張を持っているのではなく、ライフコースの多様性が許容されている社会であるかどうかすなわち人生の転機において『広い意味での巡礼』—これまでの所属集団の価値観からの解放—が許される社会であるかどうか異文化への交流頻度に関わってくるのではないかとこの仮説を持った。

そこで国際交流ボランティアのライフコースを分析するにあたって、下記のような点に着目した。

- 1) 地域に居住している外国人との交流はこれまでの生活歴の中であったか。
- 2) 地理的移動（旅行、留学、移住など）の経験が、日本における外国人との交流に繋がったか。
- 3) 地位の変化（転職や結婚、団体加入、学校入学を経験することなど）が、外国人との交流のきっかけとなったか。
- 4) 家族における外国人の評判は現在の外国人との交流にどのような影響を及ぼしているか。
- 5) 学校における人権教育は現在の外国人との交流にどのような影響を及ぼしているか。
- 6) ライフコースにおける友人の比重が大きいほど、外国人との交流に積極的であるか。
- 7) 自分自身の所属する組織の外にいる人々〔マイノリティーと呼ばれている人々〕との交流経験のある人は、外国人との交流にも積極的であるか。

国際交流ボランティア団体のプロフィール

1995年1月17日、阪神・淡路大震災発生の日後である1月22日に関西の外国人支援団体の有志によって発足した『外国人地震情報センター』は、13言語で対応する母国語ホットラインを開設し、外国人への情報提供を行い相談を受けた。1996年に発行された外国人地震情報センター発行の『阪神大震災と外国人』によると表1のように6月15日まで1000件近い相談を受けている。相談の内容は表2のように多岐にわたり、発足時に集まった20あまりの団体で相談内容によって互いに協力する体制をとっていた。また相談を受けるだけでなく、1月末から13言語でニュースレターを発行し、相談内容の需要度の高いものは記事に反映していった。震災でボランティア達は様々な経験をしたが、震災でみえてきた問題は、日常の問題でもあった。情報不足、言葉の壁、制度上の壁を日常の問題としてとらえ、電話相談やニュースレターによる情報発信に加え、外国人コミュニティとの協力を活動方針の中心に据え、1996年、10月『外国人地震共生センター』は、『多文化共生センター』と名称を変え活動している。「救われる側」と、「救う側」の垣根をなくし、共に考え行動するプロ

セスを重視したプロジェクトを実施している。多言語で電話相談や通訳・相談の派遣をする「多言語生活相談プロジェクト」、多言語健康相談や母子保険を行う「医療保険プロジェクト」、外国人によるメディア制作を支援する「エスニックメディア支援プロジェクト」、学校への通訳派遣や教材開発を行う「多文化子どもプロジェクト」、「ことばの会」、「セミナー」、「ワークショップ」、在日外国人がおかれている状況を知るためのフィールドワーク〔多文化探検隊〕というようにたくさんのプロジェクトからなっている。現在大阪、神戸、京都に拠点を持っている。

事例調査の方法

1-1 調査の方法

国際交流団体ボランティアから約2時間インタビューを行い、面接時の録音テープを起こし、第1時データを作成した。ライフコースの年代順に整理しなおし、移動歴、学歴、職歴、家族歴、外国人交流歴、ボランティア活動歴について整理してライフコースケースデータを作成した。

1-2 調査期間

1998年12月～1999年3月

1-3 調査地点

大阪・奈良

1-4 調査対象者

異文化共生センターボランティア16名

国際交流ボランティアのライフコースケースデータ

Aさん〔30歳女性〕

移動歴

高校まで北海道、19歳で大学進学のため東京へ、大学院卒業時にアメリカに渡って研修生として留学した。その後、東京にもどって個人美術館に一年半就職後、議員秘書を2年してその後28歳で結婚して大阪へ移住

(アメリカで研修生として1年留学した経験がある。)

学歴

大学院卒〔日本美術史専攻〕

職歴

美術館に就職したが私設美術館であったので、週のうち3日間出張で、あとは資料整理というきつい仕事であった。勤務後も私的な付き合いを強要されたりして体力的にも続けることができなかった。休職中、議員事務所の仕事がみつかったので転職した。しかしこの時に得た日本美術やアジア全体の美術に関する知識は、今外国人と接する中で何らかの

形で役立っている。議員事務所での仕事は、ミャンマーのスーチーさん関係のことをしたりして、在日の外国人とも気がねなく付き合っていた。議員事務所は結婚のため退職した。

家族歴

北海道で生まれた。祖父はエトロフからの引き上げ者であり満州在住経験があったので中国語、ロシア語が堪能だった。また家がロータリークラブに加入していたので、クラブの関係で来日した留学生をホームステイさせたこともある。現在夫と二人で、結婚を機会に関西へ来た。

外国人交流歴

家の近所にも製鉄工場があったので、日本の技術を学びに研修にきた西洋人がいて、その子供たちも学校で机を並べていた。またロータリー留学生とも親しくなったり、大学入学後は日系の留学生（アメリカ人）と友達になった。美術館就職中、アメリカ研修の時にはイギリス人、アメリカ人、スイス人、韓国、中国、フィリッピン人と同期研修生として交際があった。議員事務所時代はミャンマー人とスーチーさん関係の仕事もした。現在は関西に来て在日韓国・朝鮮人問題に初めて触れ、差別の実態を垣間見た。また関西に来て解放運動関係の人が、主人の職場にいて結婚式に来ていたら、自分の友達につき合わないと言ったのを聞いてショックだった。学校で表面的に習っていたが、関西に来て近所にそういう人もいっぱいいるし行き来しているのに... 関西に来てから知り合った友達がポリビア人と結婚したが、地域の中で認められないことに憤慨している。関西全体の雰囲気としてはすごく重いというか、窮屈な感じが最初して東京の友達の紹介で友達を作った。その友達がイギリス人とタイ人だった。多文化共生センターでボランティアをしているが外国人相談でも「現在住んでいる関西は外から来た人には暮らしやすい地域社会ではない」と思う。例えば外国人のための施設を現在の家の近くに建てようとするすると反対する住民運動が起こったりする。

多文化共生センターボランティア活動について

夫がセンターの代表者の友達だったので夫の紹介で参加した。センターはプロジェクトに分かれていて独立している。各プロジェクトは独立採算制で、自分自身が講演したお金や、みんながバイトしたお金をプールしておいて、そこから普段必要な日常のお金を使うとか、交通費も規則を作って片道いくら以上になる人は、上限以上はそこから払うとか工夫している。助成金をとらないとできる活動も狭まってしまうので今度はどう思うと思っている。自分は日本における在日外国人の生活を体験学習して在日外国人問題をフィールドワークする探検隊というプロジェクトに入った。最初は毎週1回のボランティアミーティングを持った。外国人に興味のある人が多く参加メンバーが留学などで出入りが激しいので、センターのしていることを研修してから参加メンバーになるというシステムを整えた。しかし研修してメンバーに育ったのは今までこのプロジェクトでは二人ぐらいである。

今年は例年の一般向けのコースとして多文化教育体験コース、出稼ぎ労働者コース〔日系ブラジル人コース〕、中国コースを企画した。またユネスコクラブから委託を受けて全国の高校生の課外活動を支援するプロジェクトも行った。同和教育や在日外国人に関する教育をまったく受けていない高校生を対象としたのでどのくらい反響があるか疑問であったが十分手応えがあった。先生や高校生側にも実行委員会を組織して毎月1回のミーティングで擦り合わせをして80人を3コースに分けて企画した。留学生コース、出稼ぎ労働者コース、在日朝鮮・韓国人コースの3コースで、留学生コースは実際留学生の人に来てもらったりアジア図書館に行ったりした。また出稼ぎ労働者コースではレストランのような集まる所へいったり働いている業界の人の話を聞いたりした。在日韓国・朝鮮人のコースでは支援団体の話を聞いたり、直接在日の人から話を聞いたりした。多文化共生センターと在日の団体は連携していて、探検隊でフィールドワークに行く所を探したりする時協力してくれる。

探検隊にも外国籍の人はいる。探検隊プロジェクトは平均年齢が若い。医療プロジェクトとかは、平均年齢は40歳を超えていると思う。お医者様や医療関係の人やリタイヤしたお父さんみたいな人がしている。子どもプロジェクトはやはりお母さん方が多い。探検隊も中には43歳のお父さんもいる。前には会報プロジェクトもあって高校卒業したての男の子と一緒に会報を全部作っていた。毎月一度、運営委員会があって、大報告会をしているが他の人がやってしまったことを聞く会だったので、評判がよくなり改善しようとしている。

Bさん〔23歳女性〕

移動歴

生まれた土地から中学3年の時引越しをしてきた。今住んでいる町は、私が住んでいる新興住宅地と、昔からある村が隣り合っている。その村の子と一緒に集団登校していたが、その村は被差別部落だった。だからといって親からは何にも聞いていないし、自分もそれを意識していなかった。中学2年の時〔14歳の春〕二週間ほど、アメリカの姉妹校提携の学校へ行った。中学卒業後、父の赴任先のスペイン、ヘローナへ、その後通学のためバルセロナで下宿生活をし、18歳の時大学入学のため帰国し尼崎在住。20歳の時父母も帰国した。

学歴

小学校から中学・高校一貫高へ入学。中学はキリスト教系の学校だった。高校から父の海外赴任に伴いバルセロナのアメリカンスクールへ通う。18歳で関西の大学〔社会福祉系〕へ入学。現在4回生。

家族歴

父、母、姉、兄がいる。姉は結婚をしている。父親の海外赴任が決定した時、兄は京都の大学在学中、姉は社会人であったがすでに結婚を予定していた。兄も渡航を考えたが、目的もなく行くより大学卒業就職の道を選択した。父は先にスペインへ渡航、その後母と自分がスペインへ渡航した。大学入学時父母は帰国できなかったが、自分が20歳になった時帰国した。父の仕事の同僚は海外経験者が多く渡航前いろいろと現地の情報は聞いた。

外国人交流歴

ある時からなんか『外人』って言ういい方は悪いと思うようになった。高校時代に自分自身が外人になる体験をしたからだと思う。スペインに行く前から何でも友達と一緒にいう行動は嫌だった。親友にとらわれたくないというか自分自身は自由だったと思う。スペインへ行って、昔から市場のような所で、単純な会話をする機会があった。『これ何グラム？これはどうなの？甘いの？』といった会話で、誤解もあって困っていると、察知してくれてスペインのおじいちゃん、おばあちゃんがいろいろ向こうからかまってくれた。バルセロナで下宿させてくれたおばあさん、80歳だがすごい人で自分の人生にとっては転機となる人だった。もう相当なお歳なのに、子供から自立していて自分のことはなんでも自分でするし、日本のおばあちゃんみたいに何から何までかまうのではなく、自由に適度に放任されていた。地球の裏側から来た言葉のわからない自分を抵抗なく家族のように受け入れてくれた。スペインとかヨーロッパではあんまり寝たきりの老人はいないと聞いたので、文化の違いを感じて老人福祉のことに興味がわいてきた。身近に感じた素朴な疑問から、興味を持って資格もとりたいた。しかし資格だけではなく、福祉大学よりいろいろ学べる総合大学の社会福祉専攻へいった。実習も行ったけれど、実際的な話を聞いて大学はあまり実用的でないように思った。医療福祉の方にすごく興味がある。スペイン時代に一人で住んでいたので体当たりでいろいろな経験をした。インターナショナルだったので、英語が上達したと思われるかも分らないが、それぞれの国の母国語を話す人が多かったのもそんなに上達しなかった。インターナショナルで知り合った日本人の友達は関東に帰国する人が多く今でも文通している。

多文化共生センターボランティア活動について

多文化共生センターを知ったのは友達の紹介であったが、このセンターが何をするのか詳しくは知らなかった。多文化共生センターは発起人の人から聞いた話だが、彼が梅田にあるフィリピン人むけのビデオショップで働いている時に地震があってビデオを借りに来ている人達が日本の情報がわからなかったり、知らなかったり、うまく伝わらなかったりするので、その人達にわかるようにニュースを流したのが始まりらしい。何でも目的をもって参加するタイプではなく、ボンと入ってしまうタイプなので簡単に入会した。スペイン時代にいろいろなことを体当たりで経験しているのでなんでもそんなにおっくうでは

ない。最初は毎回テーマを決めて入管法、医療保険のことなどを研修するプログラムに参加し、勉強させてもらったのでいいチャンスを得たと思った。そのまま勉強させてもらっていたが初めのうちはこの会の趣旨がよくわからなかったところもある。そのうち、自分が探検隊というプロジェクトに参加するということはわかっていたが、プロジェクトを企画するところまでいくとは思わなかった。顔を突っ込んだらそのまま突っ込んで行けという感じになって結果的には卒論も在日外国人のことをやっていた結果的には役にたった。今年が多文化教育体験コースに参加した。将来は社会福祉系の職業につきたいと思っている。

Cさん〔33歳女性〕

移動歴

出身は別府市で21歳まで大分にいたが、専門学校卒業後大阪に出てきた。バブルの頃だったので資格を持っているのでどこでも就職できると思い仕事は確保しないで大阪に来た。だから住む所も決まっていなかったのが最初友達の所に居候してその後アパートも探し仕事も偶然近くに決まった。4年後英会話学校の友達の影響でオーストラリア・ワーキングホリデイのため1年間オーストラリアに滞在した。帰国後病気で神戸の病院に入院している時に阪神大震災にあった。現在は大阪でOLをしている。大阪の人は冷たいという気がする。大分から出てきた時もそう思ったが他人のことには無関心という気がする。ちゃんと主張しなければ生活は守れないという気がする。しかし21の時大分という狭い世間から大阪へ出てきて正解だった。

学歴

高校卒業後、歯科衛生士専修学校卒

職歴

歯科医院勤務後、オーストラリアで日本食レストランウェイトレスをし帰国後OLをしている。

家族歴

父母は大分におり、兄は福岡にいる。親は結婚のことはあきらめている。兄も福岡にいて結婚していないのでいわゆる防波堤になっている。

外国人交流歴

英会話学校で知り合った友達と一緒にオーストラリアへ行くはずだったが、友達がダメになったので、自分一人で行くことになった。当座の宿泊所も決まっていなかったがオーストラリアへ向かう飛行機の中で偶然一緒になったドイツ女性からホテルを紹介された。ワーキングホリデイ担当のボランティア団体の紹介で日本料理レストランで働くことになった。またこの団体の掲示板でルームメイトの募集があったのでドイツ女性と一緒に住むことになった。同僚のオーストラリア人とはすぐ友達になった。現地で差別を受けたことはな

い。ワーキングホリデイ中、日本人の駐在員家庭の人もたびたび見かけたが、ちょっと私達を一段下に見ているような気がした。またオーストラリアにおける日本人観光客やビジネスマンの行動には目にあまるものがある、オーストラリア人の同僚に対して恥ずかしかった。例えば日本人ビジネスマンは、横柄な態度を取る人が多くマナーが悪い。また東南アジア売春回遊ツアーをしている人も多く、女の子を紹介してくれと頼まれたりした。またこちらに来ている日本人の女の子の中にもお嬢さんタイプのように見えてもオーストラリアで援助交際をしている人もいた。こうした不愉快な日本人の姿を除くと、オーストラリアの職場の環境は快適だった。現地の人はのんびりしていてゆっくり勤務につけばよかったしチップも平等にわけていたし快適だった。

帰国後このワーキングホリデイの体験からできた友達や外国人の友達との交際が続いている。特に外国人の友達から住居探しの相談をうけることが多い。

多文化共生センターボランティア活動について

外国人の友達から外国人向けの多重FM放送を聞き多文化共生センターの情報を得て電話を直接した。1998年6月から活動を始めたが週1回集まり探検の企画にスタッフとしてかかわっている。自分なりの探検隊プロジェクトの提案があるが、センターの先輩が仕切っていてなかなか自分の方法を実行できない。参加者発信型の発表スタイルがいいように思うが、実際には司会者進行スタイルになってしまう。今年は南米コースに参加したが参加者の中にマニア的な人がいて話題を独占するので困った。今回は初回の参加なのでだまっていたが、今後は自分の意見を出してみようと思う。

自分の人生を振り返って

大阪に出てきたのが自分の人生の転機であったように思う。2,3年前アパートの立ち退き騒ぎがあり、知ったかぶりの男友達よりも自分だけが頼りだと思った。不動産関係の契約にも詳しくなりチャンと主張しなければ生活できないと思った。何年か前に会社の人と恋愛をし失恋をしたが乗り越えたと思う。オーストラリアにもう一度行きたいが結婚でもしないかぎり定住できないだろう。

Dさん〔26歳女性〕

移動歴

大阪で育ち、22歳でモンゴルウランバートルへ3年の留学後25歳で帰国し大阪で現在大学生である。

学歴

高校卒業後、大阪の外国語大学入学その後モンゴル外国語大学へ留学し、現在帰国して再び大学生。

職歴

1999年11月からアジア関係の情報サービス有限会社に入社予定。また現在神戸のNPOでモンゴル語教室の教師をしている。

家族歴

家族構成は祖母、父、母、妹二人である。父は1991年脱サラして餃子屋を始めた。母は父がサラリーマンを辞めて自営業を始めたので自分にも好きなことをすることを認めてくれている。自分はモンゴル人の恋人がいます。妹は24歳、と17歳である。

外国人交流歴

子供の頃外国人は全然いなかった。高校の頃、外国人の生活についての勉強といえば、例えば在日外国人について強制連行のビデオなどの歴史的なことを1時間くらいした。在日の人も自分の身の周りにはいたらしいが、本名は名乗っていなかった。高校の時から旅行に憧れをもっていて自転車で放浪したりするのが好きであった。演劇部に入って活躍していた高校の学生生活がこれまでの人生の中で人生を最も満喫していた時期であった。大学の頃は外国語大学に入学したのだから留学生との交際はあると思っていたが、自分から積極的に交流しようと思ってもそんな機会はなかった。大学でも自転車で全国を旅して野宿したりしていたほど旅行好きであった。イギリスやアメリカの文化に興味がなく、世界史の授業でモンゴルに知識を持って以来、時間の流れの中にゆったりいたいと思うようになった。旅に対する憧れでモンゴルに関心があった。モンゴルへ留学してみたい気持ちが生じたのは、大学の授業の影響からではなく1年間生活体験を試みたかったからだ。

22歳の時、モンゴル外国語大学へ入学する機会を得た。自分が外国人の体験をすることによって、外から日本人を見ることができて自分が日本人であることをかえって意識するようになった。留学をした当初は、モンゴルの学生と一緒に授業はなく先生とマンツーマンの授業であった。授業ではモンゴル人とは一緒ではなかったが、食事やキャンパス生活でモンゴルの女子学生の自分を見る目が気になった。モンゴルの人は大らかなイメージがあったが、愛国心や民族意識がすごく高く、ある意味では閉鎖的で地域意識というか村的まとまりが強いと言う印象を持った。それはわたしに対するモンゴル学生の言動にも表れていた。日本は先進国の中でもモンゴルに一番援助している国だから、先進国である日本から来て偉そうにしているといったイメージを持たれていた。彼女達(モンゴルの大学生)は、モンゴルの中でもエリートだからそのようなイメージを持ったのかもわからないが、明らかに自分に対して引いていたし敵対心のような壁を持っていた。民族性として『外の人を敬う』というのがあって短期滞在の外国人にはすごく親切だが、長期滞在になると話は別である。だからモンゴルの男性が、外国人女性と結婚するというのは困難である。自分自身でもバリアーを張ってしまった。例えば日本語科の学生が近寄ってきても、日本語目当てかなと思ってしまった。帰国してから反省している。日本人に対して親愛の情があ

るから近寄ってくれたのにつれなくして申し訳なかったと思っている。

モンゴルは田舎のイメージで遊牧生活には日本で失われた何かがあるとロマンを持つ人が多い。しかし実際生活してみると田舎は田舎で都会と違うドロドロした感じがある。遊牧はのどかなどではなく、朝5時に起床してすぐく勤勉な女の人達が働いている。子育ては親戚の和でカバーし一族の繋がりは強く都会に住んでいても必ず里帰りして仲がいい。女の人達はすぐく尽くしているように見えるが、父系家族のわりに女の人々の力は意外と強い。

帰国してからモンゴルからの留学生の世話をしながら感じることは、モンゴル人は助けあう民族でありながら日本に来ると日本人化してきて「忙しいからダメ」とか言って冷たくなってしまふ人も多い。しかしモンゴル人は母国の家族や友人と別れてさみしいのでさみしさを癒すため集まって生活している。先に来た先輩が、後輩の面倒を見るというシステムがあって、男女ペアでケアシステムをとることが多い。留学生は男の人が多いのでほっとかれる人もいる。寂しさを癒すのと経済的理由から4人で4LDKにみんなで一緒に住んでいるケースもあり、大家族で育ったせいかなみんななかよしである。モンゴルからの留学生は日本人を嫌うケースも多いがこういう人は韓国人や中国人も嫌っている。モンゴルの人にとって日本での生活は、話している言葉も違うし、日本の生活がすごく厳しい。国費留学生は恵まれた生活ができるが、専門学校生は大変な生活をしないといけないし就職がない。自分のモンゴルでできた友達も日本に留学したいという気持ちが最初あったけれど日本における人間関係が問題だと言っていた。日本の生活は彩りがなく、日本人は電車の中でもみんな疲れた顔をしている。どうせ留学するのならアメリカの方がいい。

多文化共生センターボランティア活動について

帰国して大学で探検隊のチラシを見て1998年6月から参加した。偶然共生センターへ行くと大学で同期入学のメンバーがいた。毎週研修のようでいろいろな人から交代で話を聞いた。在日外国人に興味があったが、残留孤児や華僑、中国人には興味を持たなかった。モンゴルをテーマとして先生を呼んでもモンゴルだからとすることでみんなの興味はもうひとつだった。今年の企画はチーム分けをしてメンバーを分けた。パワフルな人が多く、楽しい。来年モンゴルの企画をするのなら自分が率先してする。センターでモンゴル関係の活動をしてモンゴル勉強室を開きたい。探検隊として活動をしていると、フレキシブルでいろいろな提案ができること、ネットワークを広げられること、入管制度について勉強できることなどメリットがたくさんある。反対に電話相談は自分には向いていない。古いメンバーだけで話をしている全然大変メンバーが話に参加できない。本当は将来NGOで活躍したい。多文化共生センターに専従をつける話もあったが消えてしまった。助成金がないとこのようなこともできない。

Eさん(23歳)

移動歴

3歳の時まで秋田にいて、その後高校卒業まで町田市へ、18歳の時京都の大学へ進学のため親類のいる大阪へと移った。東京の高校教師からは、『関西弁は怖いから気をつける』と言われた。東京での関西のイメージは『やくざ』や『吉本新喜劇』に代表される。自分が関西に来たのは『関西弁をマスターしたい』、『親から離れたい』からである。関西の人はとっつきにくい、友達なると深い。高校卒業後、浪人を1年した。大学時代カナダの大学へ交換留学生として留学した。

学歴

東京の進学高校から1年留年して関西の無名の女子大に入学した。自分の高校から浪人した人はみんな有名私立や国立へ行ったのに私だけ無名の大学に来たことが少し引け目に思えた。大学在学中カナダの大学へ交換留学生として10ヶ月ぐらい留学し、その経験から大学院へ進学した。

家族歴

父は秋田で高校教師であった。母も美術の教師であった。上京してから、父はレストランに勤務しグルメ探訪をしている。母は、絵画教室をするかたわら小学生に英・数・国を教えている。弟は今高校生である。戦争当時祖父は警察官だったので戦争にいなかった。父も母も裕福な家で戦争当時は不自由しなかった。

父は韓国人に対して偏見を持っているように思える。一般的偏見でありそれほど根強いものではない。自分が在日コリアンについて関心があるといったら、『危ない研究対象にのめりこむな』と言われた。母は塾をしている関係上、近くに住む北朝鮮の子を差別なく教えていた。町田市には朝鮮学校があり、自宅はその近くにあった。朝鮮学校の先生と母は友達で個人的な付き合いをしていた。その朝鮮学校では日本語が禁止だと聞いて子ども心に朝鮮人の人に日本人があまりよく写っていないのがショックだった。母に日本語禁止のことを話すと『歴史的にいろいろ難しいことがあった』と言う返事が返ってきた。

外国人交流歴

子どものころは、近くの在日外国人学校の子と幼友達であった。大学に入ってから国際交流サークルに入ったが、欧米系の外国人に関心が集中していた。英文科だったのでハワイ大学から来た留学生の受け入れや留学生寮に遊びに行くパーティーに参加したりして国際交流をしていた。大学3回生、9月から5月交換留学生制度でカナダのバンクーバーから飛行機で1時間ぐらいいたケローナに滞在した。ESLコースでアジア系の台湾、香港、ベトナムの子と仲良くなった。ホストファミリーはカナダ人だったが、カナダ学生とはなかなか仲良くなれなかった。一番の親友は韓国の友達だった。この友達から日本の戦争責任や韓国に日本がしたことについて指摘された。

このことがきっかけとなて大学院での研究テーマとして『在日コリアン問題』を選んだ。先生から『あなたは在日コリアンか』と聞かれて時、そんなことをなぜ聞くのかと気になった。『そうでない』と答えた自分自身になぜか差別感があるように思えた。大学院ゼミは韓国人留学生二人、韓国に留学していた子と私と言う構成だった。韓国語が上手な人ばかりだったので韓国語を学ぶために『民団』に加入した。在日の人ばかりで自分だけ日本人であった。『日本の体制がおかしい』と言われると、『日本人として肩身が狭い。自分が『疎外されている感じ』を時々感じた。しかし時間がたつと在日の人が日本社会から反対に疎外されているのではないかということがわかってきた。

『民団』で出会った韓国人の民族意識は『留学生』と『在日コリアン』ではかなり異なる。『留学生』は、『日本人と自分達とは違うのだ』という感がある。一時滞在ということもあってか自分が韓国人という誇りを持っている。周りもそれを認識して堂々としており、韓国の方が『歴史的に見ても優れている』ということで民族としてのプライドがある。自己主張がかなり強い。あまりにもこのプライドに固執している人は、どうかなとも思う。

それに対して『在日コリアン』は、通称名であるということで卑屈になったり、悩みがある本当の自分をわかってくれる子がいないと在日の側から壁を作る場合もある。そこで自分達の置かれた状況、差別されている状況は自分達から運動をおこして変えていかねばならないと『民団』で方向づけている。韓国人として誇りを持たねばならないからそのために言葉も覚えるし、名前も本名にする。結束が必要ということが『民団』では強調されている。『日本人はわかってくれないと在日の側から壁をつくることは、融合し合わない』と自分は思う。また日本人側も英語教育重視で戦後の教育に問題があると思う。韓国側も日本の文化が開放されていなかったが、若者の側にはサブカルチャーは行き渡っているので、日本に対する憧れもある。『民団』に参加してこのような体験を含めて『自分達とは違うのだな』という感じが強かった。しかし自分は在日コリアンが本名を名乗っていない気持ちはよくわかる。自分も大学の友達に浪人してまで無名の大学に来たことをなかなかいえなかったことがある。この気持ちと似たところがあるのではないか。浪人していることを隠していることでも通称名を名乗っていることでもそれによって友達が見捨てるのではないかと言う不安が見え隠れするところで一緒の気持ちなのではないか。

多文化共生センターボランティア活動について

このような『民団』での体験から、市民レベルでの相互理解が必要ということを感じた。在日コリアンと日本人がどう日本社会の中で共生していったらうまくいくかということを考えている。多文化共生センターの紹介で出会った『松原アプロ』では、日本人と韓国・朝鮮人がどのようにうまく共生していけるか、日本人の意識改革も在日の意識改革も共にしなければならぬという立場をとっている。在日の運動をサポートする日本人という今までの立場からの脱して共に変わろうという立場である。韓国系も朝鮮系もない。

他の外国人や帰国者、ブラジル系も参加している。私自身は大阪に来て在日問題に参加できてラッキーと思っている。日本と韓国との橋渡しができればと思っている。留学生はマスコミから作られるイメージとは別に個人的交流の中から生まれるイメージを担う。韓国人留学生が日本に対していいイメージを持ってきていてそのいいイメージのまま韓国に帰った時に日本はどうだったと聞かれた時、その友達なり、親なりに『ああ日本はこういう友達がいていい国だったよ』みたいなことがどんどん広まっていけばいいと思う。多文化共生センターでは本当は在日関係に行きたかったが、中国帰国者のところに行かせてもらって自分の知識の幅が広がった。マスコミで見た暗いイメージと異なり、帰国者の小学校の見学をすると、子供達は楽しそうだった。残留孤児の感動場面のその後や法的問題を詳細に知ることができた。

Fさん(31歳男性)

移動歴

3歳の時、大阪府内を移動しただけで、地元を動いたことがない。旅行は国内旅行は頻繁に、台湾から香港、アメリカ横断を経てイギリス、フランス、東欧、ソ連、中国へと長期の旅行をした経験を持つ。最近韓国へ数回行っている。

学歴

18歳の時、大学受験を失敗し、予備校生活を1年送った。

職歴

予備校生活の後、機械を作るメーカーに1年半勤め、その後アルバイトを続けた。一番永いのは1年2ヶ月、短いので1ヶ月そして、現在のお菓子を作る工場に勤めた。土曜日も出勤が月2回あるが、日曜日はお休みである。

家族歴

父は昭和11年生まれ、母は18年生まれだが、父と母は韓国人をすごく嫌っていて、韓国へ自分が行くというと、『そんな所へ行くな』という悪いイメージを持っている。妹は26歳で結婚しているが、自分は独身だ。子ども時に韓国人に対していいイメージを持たされなかったのが原因だと思うが、親はいまだにぼくのしていることを理解してくれない。多文化共生センターにしても『お金ももらってないのにそんなこと良くできるな』と言われる。親は別に納得してやっているならいいけど、せっかくやるのだったらなにか報償がないと意味がないのではないかとそういう考えである。

外国人交流歴

人生で充実していたのは、20歳から25歳の時だった。最初の会社を辞めた時からがおもしろかった。最初の会社の上司が旅行好きでその影響を受けた。いわば自分の人生を変えた人だった。最初の会社で1年半働いたお金でちょっと遊んで旅行した。その後5種類ぐらい

アルバイトをして、旅行は北海道とか東京方面に行く先にしてその後沖縄や九州へも行った。一人で次の予定も何も決めなくて安い宿とか民宿を泊まり歩く。お金がどこまで続くかによってその後何日られるかと言うのがあるから、帰る日もあまり決めずという感じだ。探検隊のメンバーでも旅行している人が多いように旅行を続けるプロセスを経ることによって、多文化共生に興味がわいてくるかもしれない。

僕の場合1年2ヶ月くらいのバイトの後、70万円のお金ができて、そのお金で、とりあえずアジアへ行ってそこからアメリカへ行き横断しそのまま続けてそのまた先のヨーロッパへ行って、ロシアを経て上海から帰って来た。ツアー旅行だと自分の時間はないので、自分自身で自力で行ける方法を選んだ。言葉の面だけが心配だった。

アジア方面に関心があったのは、アジアの紀行文や中国料理に興味があったのと、上司が若い時にいろいろ経験した旅行を聞かされたからだ。辞める時も自分の気持ちを理解してくれて『厳しい状況だけでも人生の経験』だといってくれたのが力になった。最初の海外旅行として選んだ国は、台湾であった。日本に良く似ていて中国大陸のイメージがあまりなかったように感じた。これが初めての海外旅行だったからすごくびっくりして先入観を持っていたが、変化した。実際に旅行して思うのだからその国に対する先入観を持っている人がいっぱいいる。『怖い』とか『分からない』、『不安である』とか。僕自身もこの旅行へ行く前は不安であった。でも実際行ってみてそれなりに怖い所も有るけれど安心できる所もあるので今は実際に行って見なければわからないと思っている。旅行している間に現地の人達に助けてもらったことも数え切れないほどあった。僕の名前も何も聞かなくても助けてくれた人が圧倒的に多かった。だから日本人以外に向こうで助けてもらった事で多かったのは切符を買う時である。僕自身、英語がわかる国ならともかく東ヨーロッパに行ったらまったくわからなかった。困り果てていたら、若いお兄さんやお姉さんが声をかけてくれて英語を勉強しているのか片言で通じて本当に親切に教えてくれて感謝している。今でも日本で特に外国の人とかで切符を買う時わからない人を見かけると声をかけてしまう。言葉がわからないのは当たり前だけ別にできなくても『助けてあげよう』という気持ちは伝わるのではないかと思う。

台湾から香港へわたり、最初の予定では中国本土へ行くつもりだったが、ゲストハウスで出会った日本人の話を聞いてアメリカへ行くことにした。香港のゲストハウスでは、日本から出た人も日本へ帰る人もいろいろな話が聞けました。僕の計画もあやふやだったのでこの際まだお金もあることだし帰国するかどうかを考え直した。アメリカは『怖い』という自分の中に先入観があったが友達の大陸横断バスの話を聞いて予定を変更した。お金がないのでサンフランシスコからソルトレイクを経てニューヨークまでバスの中でただひたすら過ごした。バスの中ではニューヨークはなんか明るい感じがあったが、バスがついたところがなんか雰囲気悪そうなところだった。何の目的もない人達がうろうろしてい

ました。1990年秋ニューヨークに着いてY M C Aに2週間宿泊した。そこには隠れて働いている日本人がいて不安な様子だった。僕自身はお金が減るので観光はほとんどしなかったがニューヨークの日本人達を見ていろいろ勉強になった。

大阪に帰ろうかと思ったがチケットが安かったので、ヨーロッパ方面に変更した。ロンドンでは安い宿泊所を探せなかった。B & Bでも3000円ぐらいで、しかも所持金は\$ 1200だった。しかし日本へのチケットは\$ 1200を超えるくらいで、これでは日本へ帰るまでお金を使えないということになり知り合った日本人に聞くとシベリア鉄道を使い中国を経由したらお金がかからないと聞いて、不安なままパリへ行ってしまった。そのころロシアでゴルバチョフが大統領やっていて大丈夫やろと思いつつ渡った。クレジットカードも持ってなかったし、最悪の場合は親から送金と言う手もあるけど言葉が銀行で通じないのでこれもどうしようもないと思った。パリでユースホステルに泊まれたので、ホステルで出会った日本人に日本に安く帰れる方法を知らないかを聞いたが、ほとんどが帰りのチケットを持っている人ばかりであった。中に留学生の人がいてユーゴ経由でハンガリーへ行くと、東ヨーロッパ発の航空券を安く売っていると教えられた。パリのオペラ座近くの日本語書店で立ち読みをして、両替屋のレートの良い所を見つけて高速バスの便、ユーゴの宿を調べた。高速バスで内戦前のユーゴスラビア、ベオグラードへ行った。

パリで立ち読みしてメモを取ったとき、ハンガリーのブダペストへ行ったらシベリア鉄道の切符が買えると書いてあったので、ハンガリーへ行こうとしたら当時ビザが必要だったので、ベオグラードにあるハンガリー大使館の場所を教えてもらった。待っていたらまた日本人のお姉さん2人がよってきていろいろな情報を教えてもらってビザもすぐとれた。その日のうちになんとか出発してブダペストまでたどりついた。

到着してすぐシベリア鉄道の切符を買おうとしたが、湾岸戦争が始まってしまって飛行機が飛ばず2週間ぐらいブダペストで足止めされてしまった。電車でなんとかモスクワに二月前後につき、念願のシベリア鉄道を使って電車の中に何日か泊まり北京へ着いた。北京から飛行機で帰ろうとしたが高かったので上海まで行きフェリーで帰ることにしました。そこですぐ帰れると思ったのですが、1週間に1回しかなく、やむなく出航の日までフェリーに切符を買った残金1万5千円で食い繋がないと覚悟した。運良く1泊300円で泊まれる所を見つけ、物価も安かったので二月下旬にようやく日本にたどり着いた。

多文化探検隊ボランティア活動について

日本国内のユースホステル友達が、国際交流協会の行事に行ったらしく、その時探検隊募集のちらしをもらってきてくれた。自分は言葉も技術もないので探検隊を希望した。他とは違う友達付き合いを経験している。多文化探検隊ができたのはその前の前の年ぐらいだが、自分は去年の9月のミーティングから入った。今年は南米コースに参加した。新たに知り合った人もできたし、ブラジルや南米コミュニティーの人達の言葉とか知識を得て

勉強になった。旅行へ行く時、『よく向こうへ行くとなんとかなる』というが、ほんとうになんとなかった。でもなんとなかるまでが大変で言葉がわからないとほんとうに苦労するということを知った。本当の姿は見えているのにあえて避けてみんな考えている節があるのじゃないかと思った。僕自身も特に大阪なら韓国人、朝鮮人、在日の人がたくさんいるのに僕の周りの人間はあまり覚えてない人が多くて『何でやねん』という話をして行くと、たいした理由はない。なんとなくというかそういう表面だけで判断している人がかなり多い。

小学校の時道徳の授業とかで部落差別とか習ったけど、あんまり記憶に残っていない。高校の時、在日韓国人であったクラスメイトのお父さんのお葬式にクラス全員で行く機会があってそのお葬式がチマチョゴリを着た韓国式のお葬式だった。今、パートのおばちゃんて在日の人が7年ぐらい働いている。日本人と韓国人とが、同じテーブルで自分のしぐさで食べたらお互いがお互いの姿を見てなんて食べ方をしていると思うこともある。これは習慣の違いで生じる。こういう習慣だからこういう食べ方をしていると思うことがすごく大切だと思う場面がある。自分の職場には在日のおばちゃん2人いるが、日本名で働いていて本名を言いたがらない。日本人のおばちゃんだけになった時、悪口めいた陰口みたいなのを聞いたから僕はそれがなんかいやだなと思いつつも、習慣がわかってないのだから仕方ないかなーと思うこともある。だから今、僕が興味あることは在日の人達のことかな。僕自身韓国に2、3回旅行に行って在日の人と韓国人との溝も感じる。韓国へ行って在日かと聞かれて日本人とわかると態度が変化したことがあった。韓国でコンビニで働いている若い人の中には、日本に住んでいる韓国人のことをあんまり知らない。僕も在日の底辺や背景の部分とか、僕も本を読むくらいでそこまで知らない。多文化共生センターで在日の高校生が活動しているけど、あの年ですごいなーと思う。

多文化共生ボランティアは友達ができるから関わっている。他とは違う友達つきあいができるから。お金は仕事をしてもらっているからいい。親の言うように『お金ももらわないのに世話をしても…』とは思わない。

人生のキーパーソンは最初の職場で旅行を勧めてくれた上司である。つらかったのは旅行の資金をためるためバイトをしている時である。今の希望は今年の8月にロシアへ行くこと。ハバロフスクやウラジオストック、イルクーツクへ行きたい。仕事はおいても旅行はしたいと思っている。

Gさん（22歳、女性）

移動歴

今住んでいる奈良から動いたことはありません。

学歴

付属高校からエスカレーター式で、短大へ進んだが短大卒業後4年制大学へ編入した。

家族歴

父は46歳で戦争のことも言わないし、同和の話もしない。妹は高校生で公立高校へ通っている。

外国人交流歴

高校時代は外国人に関心がなかった。同和についても知らない。戦争について社会科でも学習しなかった。短大時代、出会ったマスコミ出身の先生の影響を受けて外の世界を知ってやりたいことが見つかった。その先生の授業で南京大虐殺、太平洋戦争について知った。MBS人権レーダーに出演する機会を得てレポートをした。朝鮮学校を見学したり在日韓国・朝鮮人のことを勉強する機会を得た。それまで民族教育の本などを讀んだりしていたが人権のことを取材することによって直接在日の人に接することができた。そんな関係で卒論のテーマも自分で掘り出してきた。人権の問題に関するテーマだった。同和や障がい者の問題は、これまであまり講義で聞けるものと思ってなかったのが新鮮に思えてそういうことを勉強したいと思うようになった。そこで外国人の人権問題に興味を持つようになってアジア図書館で短大の卒論の資料を調べたりしていた。

異文化共生センターボランティア活動について

アジア図書館で見かけたらしに異文化共生センターが書籍をだしているということもあってセンターへ直接連絡をとった。センターへ初めて入った時、あたたかく迎えてくれたし、その時ミーティングをしていた。雰囲気は『なんかいい感じだなー』と思った。その後短大の卒論を書きながらボランティアもしながら自分の実体験もいれて卒論を書いた。最初自分が一番得意なものは何かと聞かれて困った。

高校3年生の時に震災があった時多文化共生センターはその時電話線を引いて、7言語や8言語で外国人に情報を送る役割を果たしていた。その後子どもの問題とか結婚のこととか素朴な外国人の電話相談があってそのままほっとくわけにはいなくなったようだ。今では7つぐらいのプロジェクトがあって自分の属する探検隊もその一つである。医療プロジェクトなどに比すれば探検隊は他のプロジェクトからしたら遊びに近いものである。各プロジェクトは独立採算制である。探検隊は覗き見みたいな感じだから覗き見られた方は嫌がるかもわからない。探検隊の1回目はめちゃくちゃだった。探検隊という形で日本にいる多文化の人達とのふれあいにスタッフも素人として参加させてもらって自分自身自ら勉強しようという形であった。下見の約束を取ったり、実際に下見した結果センターでのミーティングをする中で最初15、6人いたスタッフもパツといなくなってしまった。ボランティア同士の役割分担もはっきりしなくて、自分がするのが嫌なことは他人に押し付けたり、交通費やその他も自己負担だったり、一人に仕事が集中したり、受け入れ団体

に謝礼をしたりすることで負担が大きい。最初の頃は入国管理局事務所へ中国人のふりをしていたりしていた。最初はマスコミも取り上げるので1コースに50人くらい集まって大変だった。

今年の探検隊の活動で、やっとおおまかなプランが立てられるようになった。2, 3回目は全然人がいなくなってスタッフが参加者として廻らなければならなくなった。学校や新聞で配って募集するので若い人が多い。今回の中国関係はあまり人が集まらなかった。スタッフはボランティアをしようと思って入ってきた人は少ない。多文化に興味を持っているから加わった人が多い。だから人間関係が少ししんどくなる。ボランティアの仕事がハードだから繊細な人はたぶん無理だと思う。病気になって辞めた人もいる。相手の人に連絡をとったりボランティアなのにここまでしなければいけないのかという部分がある。企画力や文章力もいる。例えば『私はこれなんだから何々やって』といわれるとむかつく。担当はこの人という責任は持つ形で今回は役割分担をした。現在15人ぐらいが実働しているが勤め人が半分、学生が半分で自分の興味を引っ張り出してきていろいろしている。だからボランティアをしきる人、すなわちオーガナイザーが必要だと思う。

今後の進路

中国へ留学したいと思う。父は反対していて、母は問題外だと思っている。韓国にも関心がある。戦争のことはひっかかる。中国人とも近くなりたい自分があって中国の文化も知りたい。中国で生活してみて、どちらかというマイナスに見られている面を見に行きたい。閉鎖的な所もあって、共産党だからというところや、ゴミゴミしているとか、遅れていると日本人に思われていることを見に行きたい。文化の差というか生活も不自由だろうけどそれをもっと知りたい。差別を受けるとか不安な部分もある。日本が戦争でしたこともたぶん影響しているだろう。歴史的な論争もどっちがほんとうなのだろうかとか疑問がある。そこも行ってみないと分からないしどっちの言い分も知りたい。中国人には今まったく友達はいないけれど、中国に住んでいる日本人の友達はある。アメリカとかも行きたいけれどその前に中国へ行きたい。最初は反対していた父も、大学でバイトをして自分自身で資金を貯めるとOKしてくれた。中国の大学では語学のクラスに入るが、専門はまだ決めていない。実際の生活を体験して、自分が今考えていること、聞いたことが本当か確かめたい。

Hさん(33歳男性)

移動歴

18歳まで横浜にいたが、京都の大学に進学して19歳の時に京都へ1991年26歳の時から大阪に移り現在に至っている。

学歴

高校から1年浪人して京都の大学へ入学した。本当は生物系をしたかったが希望の学部に入れず農学部に入學した。廃寮反対運動をして大学と交渉し休学1年、留年1年をして計6年間大学に在籍した。

職歴

翻訳や日本語教師を目指したこともあったが、大学卒業後1年失業して、大阪の私立大学に職員として勤務した。1995年震災当時事務職員として大学の被害に対処した。特に図書館の被害が大きかった。直属の上司が被災して長いこと出てこれなかったので仕事は大変だった。同僚へのボランティア援助もこの時した。この大学の学生は震災で亡くなった方はいないが、教職員の家族で亡くなった方がいた。多文化共生センター(当時地震情報センター)には震災の立ち上げ当初からボランティアとして外側から加わっていた。もともと私立大学の事務職員は期限つきで働くつもりだった。いつかはやりたいことを仕事にしたいというのがあってやめた。仕事を辞めた後充電期間は、翻訳とか日本語教師にちょっと関心があって、通信教育で勉強していた。ボランティアでしている外国人に対する相談の方が忙しくなって続けられなくなってしまった。その後多文化共生センター専従の募集があって採用された。

家族歴

父は戦争の時10代前半だったから兵隊にとられる年齢ではなかった。もともと田舎に住んでいたから疎開はしなかったが、母は7歳の時、疎開を経験した。弟は32歳で妹は28歳である。

外国人交流歴

高校の時、同じクラスに中華学校卒業生が何人かいたので自然に付き合っていた。しかし地域に彼らに対する差別はあった。誰かからまれて困った時は『自分は中華学校や朝鮮学校出身というとうよい。』というジンクスがあって、『中華名や朝鮮名を語れば、相手は怖くて手がだせない』と思われていた。同和教育も高校までまったくなかった。

85年入学して大学に入ると廃寮反対運動に没頭した。3回の暴動があって巻き込まれた。寮関係の役員はしてなかったが、中心メンバーだった。院生同盟などからよくいじめられた。大学側と喧嘩したり話し合ったりした。地道に関係を積み上げて仲良くなって行った部分もある。学生運動に関わりながら学生運動の活動領域として釜が崎の越冬支援の会に入った。

87年、寮の友人に誘われて「カラパオの会」という神奈川の外国人労働者支援の会に参加した。町に不思議な魅力があって今でも付き合いが続いていて盆と暮れには必ず行く。「カラパオの会」は私にとってはすごく大切な繋がりで影響も受けている。

88年、89年はYWCAの外国人相談窓口ボランティアとして活動していた。大阪にも

アジアフレンドが発足した。大学に事務職員として就職中震災に出会った。この時多文化共生センター(当時地震情報センター)に関わった。当初は『友達が被災地にいるけど無事か』『避難所に行きたいけどどう行ったら良いか』と言う質問に対応していた。被災地にチラシをまいたり、レストラン・教会へ援助をしたり、ラジオFM802で外国人援助の電話があるというテープを流してもらった。震災の時に日本人から『避難所からでていけ』とさりげなく言われたり、直接言われたり震災の時外国人と日本人の間に出てきた問題は、普段から多文化共生していないということに基づくということがだんだんわかってきた。この時は12言語できる元気なスタッフがいた。いろいろな形でボランティアを募集して協力を願い出てやっていた。

多文化共生センターの専従職員としての活動

相談から始まった多文化共生センターは『相談する人』は助けられる人、『相談を受ける人』は助ける人という社会関係の固定化に疑問を持った。現在プロジェクトも増加しているが特別な専門家集団になっていくことをあまりいいことだと思っていない。例えば医療プロジェクトが看護婦さん、お医者さんによって担われるだけでなく、ごく普通の人が健康診断の準備を整えたり、広報活動をすることによって誰にとっても関係のある医療をみつめるいい機会になる。それは相談でも一緒に、通訳や法律に詳しい人ばかりがいれば良いという問題ではない。外国人を通して制度の問題を考えて行くことは自分にとっても関係のあるということに気づきそれを考えて行ける集団を作ることになる。

会員組織になっているが、ボランティアをする上で会員かどうかは一切問わない。会員は会費で支えている部分が多い。学習会も必要と思ったら学ぶし、学習会にでて成果が得られなかったら別の場で活躍してもらえばよいと思っている。この事業に関する責任は重要だと思っているが、自由に活動できる部分も必要である。わたしのポリシーだが、まずは行動があって責任は後からついてくる。責任の話をすれば何もしないのが一番無責任なんであって、責任をとれないからなにもやらないというのは間違えて、必要とあれば自分から学ぶ方法もある。もちろん、単純作業は必ずあるし締め切りの存在する仕事は必ず実行しなければならない。部分を切り取られた仕事をお願いせざるを得ない。参加者がいないと探してこないといけないし、翻訳にまわしたり、資料をつくったりもう自分のペースでやる以外の仕事である。しかし自由でおおらかな部分も残さないといけないということもある。

専従職員は常勤でただ今2人、週1回か2回の非常勤は6人で会計担当、会報担当、エスニックメディアプロジェクト担当、事務関係、子どもプロジェクト担当と別れている。会員の出入りは激しい。将来はN.G.Oの組織になる予定である。外国人労働者の相談を続けて思うことは、法に守られている人の方が相談してくる。日系人の場合派遣会社への依存度が高く、そこに問題があった時別の手段を考えにくい面があるように思う。それに対して

ビザのない人は仕事もひっそりと自分で見つけている。日本社会の良心的な人との出会いで生きている部分もある。このような人は『やくざ』も含めて日本社会と関わらざるをえない。現在の自分の役割は会議にでたり、別の団体との繋がりをつけたり、ボランティアの拡大をすることだと思っている。多文化共生センターはアジア向けの要素が強い。欧米系への憧れの強い人は国際交流協会を紹介している。外国人といっても良い人だけが集まるわけではない。可哀想な人に施しを与えるように考えている人は自分が変わるか、離れて行く。多文化共生センターの仕事の喜びは自分を豊かにしてくれるし、知らないことを知る喜びがある。また外国人にとっての問題というよりも、社会全体の問題と繋がっている。外国人の子どもの教育問題は、日本の子どもの教育問題でもある。『中国語でしか喋れないとかポルトガル語でしか喋れない子どもが日本の中学・高校で勉強できるか』ということは、『日本の子どもでもそういう問題を抱えている子どもがいる』と言うことに必ず繋がっている。個人の能力差を無視した一斉教育の問題点に繋がる。こういうことによって自分の知らなかった一面を発見できる。

自分の人生について

学生の時、寮運動によって自分の人生は変わったと思う。市民運動との連携で人のネットワークができた。

中学、高校と自分は将棋指しになりたいと思っており、大学では生物学者になりたいと思っていた。しかし試験を受けなおしてまでとは考えなかった。また海外経験は一度もなくこのような活動をしているのはめずらしいと思う。

専従として多文化共生センターに就職してしんどいことも多い。しかし月並みだけれど、異文化発見という、『知らないことを知る喜び』がすごく自分を豊かにしてくれる。外国人の相談をしている内に自分でも知らなかった日本の制度を発見してこの制度は自分にも役に立つと思ったこともある。

Iさん(20歳女性)

移動歴

生まれてからずっと同じ所にいる。

学歴

府立高校を卒業して女子短大に入学した。1日3時間程度の授業で卒業してしまった。授業に出なくても単位をくれるやさしい先生が多かったからだらけてしまった。卒業後就職浪人をしている。

職歴

卒業間際に学校推薦で会社に内定した。研修ということで3月内定した会社にアルバイトとして入ったが社員並の仕事をいきなりさせられた。出産退職の方の引継ぎにパソコンの

使い方、発注処理、電線の種類などで戸惑っていた。御茶汲み、コピーなど簡単な仕事から入ると思っていたのでストレスがたまり続けられなかった。追いつめられた感じがしてなんか悪い方へ考えてしまった。自分で勝手にプレッシャーを作ってしまった。自分自身の努力不足と思う。母親はまじめすぎて逆に自分を追い込んでしまっているのではないかとっている。親は会社を辞めることに反対であったが、自分の殻に閉じこもっていた。何もやりたいことが見つけられない。ただなんとなく就職するのが嫌だしそうかといって学校へ通うかどうか決めかねている。それで『絶対内定』という本に紹介されていた就職活動塾に入った。就職浪人している子、就職留年している子同士が集まっていて授業研修をうけて自宅ゼミで自分探しをしたり、ディスカッションをしている。自分が就職活動するとしたら学校卒業後は何の援助もない。会社のパンフレット、会社研究もできない。就職戦線についていってない。この就職ゼミに通っている仲間でサークルを作って、自分自身のやりたいことを探している。そのサークルでは『自分のことを話さない、隠している』と言われた。短大生の時は就職、結婚と流されている感じがしたが、この就職サークルでは目的に向かって毎日すごくがんばっている感じがして自分にとっては大きな存在である。

家族歴

父は58歳、母は51歳、姉は26歳で入籍結婚をした。

外国人交流歴

高校の時、在日の人とわかっても友達として自然に付き合うという趣旨のプリントを配布された。

多文化共生センターボランティア活動について

就職サークルの人に『子どもと一緒に遊ぶと自分の感情が出せる』と言われて、多文化共生センターへ参加した。子どもと遊べるボランティアを捜そうということで大阪の青少年会館でこの多文化共生センターのパンフレットを見つけた。今は入って間もないからお互いのことをあまりみんな知らないから話ができない感じがする。子どもプロジェクトへ入って今まで3回活動をした。1回目は中国の女の子の勉強を手伝った。、2回目は中国の男の子で、3回目はボリビアの女の子2人だった。子どもとどう接していいか、今まで関わっていないから分からないことが多い。子どもより付いてきている大人の言葉のほうが不自由しているようだ。大阪府の子ども家庭センターのメンタルフレンドもしている。今月始めたばかりであるが、2日間の研修をしたばかりで実際にはまだ子どもに接していない。子ども家庭訪問と言って、不登校の子のところへ家庭訪問する仕方をベテランの人がロールプレイングによって見せてくれる。2人の信頼関係トレーニングもした。ボランティアを始めて3ヶ月、今までは自宅にいて何もしなかったが、変化した。就職サークルには入っているが、現在、就職先は探していない。なぜなら会社で働くことによるイメージを持っていないから。カウンセラーや専門職になるために大学にはいりたいとも思う。しかしその先

が見えてこない。

自分の人生について

一番楽しかったのは短大の1年生の時で友達ができ、世界が広がった感じがした。一番つらかったのは高校の時の友達関係で、人との関わり方がわからなかった。短大の2年生のときも友達とけんかしたことはつらかった。今も毎日が不安でつらい。高校も大学も運で合格したようなものだった。自分がみじめだから泣くことも多い。悩むとガーンと悪い方へ入って行く。何が悲しいのかわからないけど泣くことは多い。

Jさん(23歳女性)

6歳の時まで大阪にいたが、それから大分へ移り高校卒業とともに18歳で短大入学とともに大阪へ戻り現在にいたる。

学歴

親がうるさく高校も自分が選べなくて親の意見でここのレベルが高いからということで高校が選択された。そんなわけで高校途中で行かなくなった。2年間丸ごと行ってなかった。高校のクラブ全員加入もどうかと思った。しかし担任の先生が若くてやる気のある先生だったので通知表を適当に書いてくれて卒業ということにしてくれた。小学、中学、高校と全部公立でストレートで大学へと進んだ。大阪の親戚の叔母が高校の教師をしていて、その親戚の近くに私立女子短大があってそこの日本文学専攻に進んだ。地方から来ている人も多く難易度も低かった。短大の倍率が高い割には受ける人のレベルは低いと思う。短大1年の10月から就職活動をへ始め、その時からもう友達はいなかった。震災時ははがき書きをしていた。短大卒業後、企業に勤務したが、学歴差別を体験して、4年制大学へいこうと決心した。編入生募集の記事を試験の1ヶ月前に見て、試験と面接を受けて合格した。130人中8人だった。現在社会学部の4回生で将来は大学院へ行くか、留学をしたいと思っている。ブラジルとか行きたい。

職歴

高校時代に短期アルバイトをしていた。短大に入ってから、スーパーのレジやお花屋さんのアルバイトの後、外資系の企業に就職した。そこの企業はとりあえず新人をあちこち担当させてみて向いている所に配属と言う形だった。外資系と言っても日本にある会社だから学問みたいなのがあった。書類は英語で書かれパソコンを使いこなさないと行けない職業だったのでついていけず窓際族をしていた。そんな時大学編入の広告を見て4年制大学への編入を思い立った。

家族歴

父親は会社に行きながらその町の議員をやっている。母は共働きで学校から帰ってきても親はいなかった。夕方は帰ってくるが夜中目をさましたら親はいない。親は中3までう

るさく自分を干渉した。中学時代、先生から友達はいないのではないかといわれた。高校も自分で選択できず、親がわりやりレベルの高いところへ行かせた。4歳から習い事が多くスケジュールがつまっていた。日本舞踊、少林寺拳法、生け花、お茶、絵、書道などいろいろしたが、絶対これが好きだったというものはない。いやだといっても母親が強制的にそれをさせていた。反抗期がなく結果を出したいタイプだったので一応それなりの結果を出していた。公文、英会話、数学を習い、家庭教師も雇っていたので、受験は苦労しなかった。登校拒否し始めた高校2年から親は何も言わなくなった。もう死んだものとあきらめている感じだった。

外国人交流歴

大分の頃、水商売系のフィリッピン人が住んでいた。周りの近所の人から『あまり関わっては行けない』と言っていた。大学へ編入して多文化共生のボランティアは挑戦的にやった。ずっと社交ダンスをしていたので、ラテンの方に興味があった。南米的な踊りが好きなのでブラジルとか南米の文化に興味を持っている。ボランティア精神ではなく文化に興味があった。南米の人と交流することによって、ラテン時間に驚かされる時もある。夜のパーティーは1時から始まる。また自分自身よりも周りのことにも目がいくようになったと思う。ブラジルに対して見る目が変化した。前は『なんか汚い貧しい村とかそんな感じだったが、今は生活はたいへんだが、なにか苦しい生活をしていてもみんな集まって夜わっと突然踊り始めてにぎやかにパーティーを開いている。ブラジル人から日本人について文句をいわれたこともある。ペルー人の前でブラジル人の話をして叱られた。ケーキを出した時も南米のケーキと言ったがどこのケーキと詳しく聞かれた。自分の身に置き換えて考えてみると中国の文化と日本の文化を間違えられると自分も不快になると理解した。また日本語が不自由なため、5歳の子どものように扱われた経験話を話してくれた人もいて、日本における外国人の心情を察することができた。

多文化共生センターボランティアについて

多文化共生センターへ友達と一緒にいった。共生センターに入って友達の輪が広がった。積極的に4年制に編入したが、学生の輪には入れなかった。短大でも大学でもそうだけど、わりとなかのいいグループみたいのがあってそのグループになって卒業までと言うのが多い。たまたま出席番号が近くで入学式で話したりしてそのままグループになると言うケースもある。編入したのですがすぐ上級生だったからそのようなグループの輪に入れなかったというのもある。しかしそのようなグループは卒業したらそれきりということが多い。

多文化共生センターはそのようなグループとは違う。ただ集まってご飯をたべるだけというわけではない。多文化に通ううちに一緒にやっているスタッフの人達の人間性や人柄がよくて一緒にいて楽しい仲間だから、このメンバーでないとやっていない。イベントはたくさんある。スペイン語の上手な人もいる。探検隊が主催すれば必ず参加する。他のプ

プロジェクトにも協力する。

イベントは、毎週それぞれ細かいテーマがあり、計画書を作る。今回の担当は南米コースを担当した。参加した人の動機は様々でパーティーに顔を出すたびに女の子と遊べるという人もいるし、今までの南米に対する認識を変えたと言う人まで様々である。自分は今回参加して、教会の役割を再認識した。シェルターの役割を持っているのだと。また自分自身、外国人の認識の仕方も多文化共生のボランティアをするたびに变化した。今までは日本が豊かだから来て何かいろいろと犯罪をしてしまうのかと思っていた。新聞の表側だけを見て、外国人側の事情に目をむけたことはなかった。外国人労働者がどんな感じで連れて来られてどんなに大変な目にあっているのかということがわかってきた。多文化共生センターの労働者関係のゼミで出ている。いつも電話相談を受けている人が相談の手順を説明して仲間内で勉強するアットホームな感じである。学校でボランティア関係の授業、福祉関係の授業で習ったことを検証できる。今は探検プロジェクトに所属しているが相談プロジェクトにも興味がある。

自分の人生について

自分はこれまで、ダンスと食べ物で生きてきた。不幸せは高校が自分にあわなかったこと。そして小さい時から習い事ばかりで子どものころから近所に友達ができなかったことだ。楽しかったことはその時その時ある。つらかったことは、父、母とも保育園に迎えにこなかったこと。近所や周りから不自由で可哀想といわれたけど、不自由ではなかった。支えられた人は、高校へ行く気がおこらなかった時社交ダンスを教えてくれた先生で、社交ダンスは今の生活の中心である。

Kさん(30歳男性)

移動歴

大阪からほとんど離れたことはない。海外旅行はツアー旅行としてスペインへ行ったことがある。ツアー中自由行動ばかりをして叱られた。

学歴

中学から高等専門学校へ入学した。受験が1回で済むと言う不純な動機と進路にバリエーションがあるというメリットと、モノ作りが好きと言うことで『機械工学』を選んだ。

職歴

高専卒業後、工場の機械設計を経て、21歳の時大阪府職員として採用試験を受け税務所4年、環境整備4年、職安に現在いる。仕事は形式でやるよりいろいろなことをやれるように自分の能力を磨けたらいいと思う。飽きっぽいところもあり同じ事と10年続けられない。環境の変化には結構強いほうである。

家族歴

父は55歳、母は54歳、弟は26歳である。家族は転職に反対しなかった。

外国人交流歴

中学の時は同和地区が隣接していたので、人権教育の時間は多かった。しかし小学校時代、中学校時代共に在日の友達はいなかった。居住区の小学校区はクラスの何分の1かが、韓国の子と言うことは聞いた。

高専に入学してから、スペイン語の勉強を始める。スペイン語はマラドーナがきっかけで英語はポップスの調べが心地よかったので習得しようと思った。

多文化共生センターを通じてスペイン語を使っている在日の人との交流が多い。ペルー人の友達と、夜中にダンスパーティーをしたり、彼らにコンピューターを教えたりしている。ペルーの人達は同じ人間と言う感じで日系の人もいるが外国人として意識していない。完全に友達関係でダンスも教えてもらっている。自分の上司に最近なった人も見学に来ている。

多文化共生センターボランティア活動について

就職して環境センターにいた頃、スペイン語教室を多文化共生センターで開いていると聞いて多文化共生センターに顔をだした。そこで1回ボランティアしてみないかと誘われた。スペイン語やポルトガル語での電話相談は言葉だけが勝負なので通訳ボランティアは難しい。そんな時、主催者のTさんから、病院ボランティアとともにフェスティバル系統のイベントのお手伝いをしないかという誘いがあった。『チン問屋さん』として、マレーシアの女の子を真似た格好で化粧して参加した。多文化共生センターでは、探検隊、子どもプロジェクト、ペルー人の情報誌作りに携わっている。

最初から子どもプロジェクトに参加している。チラシを7か国言語で書いて国際交流センターへ持っていく。スペイン語関係でお祭りやイベントをやっている。遊びにも勉強にも対応している。ペルーの子が来ると、基本的には日本語を使うが、日本語がわからない時はスペイン語を使う。あるペルーの子は子どもプロジェクトに参加するのに電車代の負担を軽くするために、自転車で行ったり来たりしていた。ところが、父親が繁華街を土曜に行き来するのを心配して子どもプロジェクトの参加を拒んだ例もある。

中国の子に数学を教えるのはハードだった。自分で解いて説明するのは困難であるように思う。『日本の大学に行きたいが、日本の大学は中国語で問題はでるか』と聞かれたり、『日本は中国の隣だから中国語を勉強しているのではないか』と言われたりした。『日本で勉強する外国語は英語だよ』というとカルチャーショックを受けた様子だった。そこで『じゃー中国でも隣なので日本語を勉強しているか』と問い直すと『やはり英語だ』という答えが返ってきた。そんな調子で英語を使って話をしたり、日本語を使うなり言語を選んでいる。勉強を教えてほしい方は中国の方、友達がほしい方はペルーの方というようにニーズがわかれているような気がする。現在子どもプロジェクトでは中国の人が多いので中

国語のできる人が必要かもわからない。英語ができる人なら英語でコミュニケーションがとれるかもしれない。

自分の仕事と、ボランティアをしている事がかなり接点がある。職安での行政担当者としての自分は、中国とインドシナを担当していて、中国残留の少年の書類やインドシナの対策などに関与している。自分自身としては興味のあるのは、ペルーなどの方が他の担当の人がしている。その人はスペイン語ができないので、自分だったらできるのと思う。自分の中で目標を持っていて行政のあり方とボランティア団体との連携とか、関係を構築して行く方法を模索している状況にある。よく『行政の人は冷たい』とかいわれるけどそれは温度差だと思う。職場の担当者も辞令で決まるし、外国に興味ない人がやったりするので、積極的でないし、むしろ嫌だったりする人もいる。ボランティアの方は積極的であるのでこのところの温度差だと思う。冷たく扱われているのではなくこの温度差を感じるのだと思う。個人的には、教会の集まりに興味がある。宗教的に興味があるのではなく、在日外国人に対する教会のアプローチに興味を持っている。連携した方がいいと思うし利用させてもらっている。

自分の人生を振り返って

辛かったことはあまりない。嫌な事が合ったら楽しいことを見つけにすぐ行く。うれしかった事は自分一人でスペインへ行ったこと、悲しかった事は身内のおじいさん、おばあさんが死んだことであった。自分の人生に影響を及ぼしたのは、それまでアメリカ一辺倒だった自分を南のほうへひっぱっていった、マラドーナだと思う。

Lさん(30歳女性)

移動歴・学歴

大阪でずっと小、中、高校時代を過ごし、京都の大学へ進学した。6週間パークレーへ語学研修に行った。卒業後就職したが、オーストラリアの日本語学科に留学した経験を持つ。

職歴

大学卒業後、予備校の子会社で教材の修正や構成をしていた。大学院へ行きたかったが、父母から一度社会にでるように勧められる。オーストラリア留学後、大学の非常勤職員として勤務するが、来年から国際交流協会の職員として働く。

家族歴

父親は中学校の教員をしていて現在63歳で非常勤講師をしている。母親は中学校の英語教師だったが、4年前56歳でなくなる。

外国人交流歴

英語への興味は母の仕事もあって家に教科書以外の絵本があったので読みたい一心で中

学の時英語を勉強していた。高校生になって英語の成績は落ちた。

住んでいる地域が『きつい』と表現される同和教育の地域で中学1年から同和教育、人権教育が行われてきた。小学4年生くらいまで人権教育の基礎を習って5、6年生になって身分制度の問題や在日の問題について学習した。中学校区は、同和地区があったが、新興住宅地化しているのので、同和地区出身の子がいても人の出入りの激しく、生活は中流で、目に見えて同和地区というのではなかった。また朝鮮人部落もあってその人達の中学校もあった。

小学校の時、私達と仲良かった子が黒板の前に立って先生が今から彼女から話があるからと言った。彼女が『私は日本の名前の他に韓国の名前もあり私の祖父が韓国から渡ってきたので韓国の面も持っている』と発表した。私はその時『そんなことをみんなの前で言わないでも、仲良かったのに今更なんでそんなことを言うのだろう』と疑問だった。あとで友達に聞いたら小学校3年の時『朝鮮、朝鮮』といじめられることがあったので先生が発表の機会を作ったのところがうか』と言われた。その後彼女は本名を使わずに日本名で中学校へ行って、中学校でも本名を使わずそのあと転校した。こんな経験があったので『みんな同じだからなかよくしようね』という刷り込み教育はおかしいと思った。何か違いがある事に蓋をできてしまっていて『同じようにしようね』と何回も強調して言われることや違いがあるのにそれが言えないムードになることが気になった。今の教育はどうかかわからないが、10年から15年前の教師はそうだった。こんな気持ちだったから中学校の時はなんか反抗する気持ちもあってそれも気持ちが素直に言葉にならなくて、先生から自分は『あなたの成績はいいけど、こういうこと〔人権問題〕はわかっていない』と言われた。この間、出雲地方出身の友達と話しているとこのような教育は地方によって教育も違うし日本民族でも東京人は大阪人に対して『大阪で巨人とか言うの怖い』という偏見を持っていると聞いた。親からはこのような朝鮮の人に対する話を一切聞いたことはなかった。

1987年から1988年にアメリカでの語学研修の時、自分が差別される経験を持った。プレースメントテストをして自分より成績が下だったフランスの男の子が私に向かって嫌な顔をした。学校側も毎年起こるアジアとヨーロッパの衝突を知っていてキャンプなど共同生活をすることによって緩和する機会を作っている。その時、ゲームやグループワークをしたりした。イタリアの女の子がダンスでアジアの男の子と手をつなぎたくないと言っていて嫌がっていた。人種差別だと私は感じた。以前留学していた人もそんなことはどこにいてもあると言われた。

また韓国と日本人の子のトラブルもあった。毎日韓国の男の子に日本が昔自分の国にしたことを攻め立てられ、日本の子も我慢していたが最後にきて『謝ったらいいのだったら謝る』とまでいったらそれから何もいわなくなっただけ。その言われた子はもう絶対韓国の子は嫌と言っていた。このような『英語ができなければバカにされる』『差別される』

といった経験がアメリカへの留学を断念させた。旅行なら良いけど、長い滞在は嫌と思うようになった。

アメリカは嫌だったけれど、予備校で働いていると表舞台に立って自分も教えたいという気持ちになった。それで日本語教師になりたいという夢を抱いたのでオーストラリア留学をした。オーストラリア留学を決めたのは、お金の問題と治安の問題もあったが、大学に日本研究科、日本語応用言語学科があり現地で日本語を教えている先生とオーストラリアの生徒に囲まれて勉強できることが魅力だった。オーストラリアの学生は日本人学生とコミュニケーションできるようにインタビューの宿題をもらってレポートを書いていた。1年の時はコンピューターの操作をオーストラリアの子に習い、私が日本語を教えた。その子はフットボールやアイリッシュパブに連れて行ってくれた。日本語が上手なそのオーストラリアの学生は日本人の同年齢の学生は『幼い』感じがするともらしていた。卒業の時、他の人は日本語教師になりたい人が多かったが、自分は地域に住んでいる在日外国人のサポートをしたいと思った。地域での自立の手助けがしたかった。外国で自分が苦勞したり、自分が友達とやっていくのに苦勞したことを生かしたい。日本語教授法を教えてください先生は文化庁や国語研究所にいたり、中国帰国者定住センターにいたので、役所とか国際交流団体で日本語を勉強したい人のサポートは必要だと勇気づけてくれた。またリサーチを教えてください先生は、『自分が見たものが一般的と考えるのではなく、例外もあるということをいつも考えておきなさい』といったことが印象的だった。

多文化共生センターボランティア活動について

父親と同じ学校で昔働いていた中学校の先生が市のボランティアで日本語教師をしていた。多文化共生センターの子どもプロジェクトを紹介してくれた。子どもプロジェクトのミーティングで話し合いをし、子どもが来たら一緒に遊ぶ。日系ブラジル人の子どもと中国の子どもが多い。英語の宿題をしにきていてもトランプをしたりして同じ国同士固まっている。教える時はオーストラリアでの経験が役に立つ。こういう言い方がわからなかったらこう言う言い方をすればよいと判断して簡単なレベルに変換できる。子ども達に日本語を教える時以外にも日本を伝えることができる。日本語で書くと話すのでは能力が違うこと、母国語の認識能力がないと第2言語の習得が難しいことをわかっていないと子どもを理解できない。

Mさん(33歳女性)

移動歴

18歳まで山口県で育ち、専門学校入学と共に大阪へその後、27歳の時スキー場でのアルバイトのため3年間岩手県へ、アルバイトでためたお金をもとに30歳の時インド旅行に出る、最初シンガポール経由でネパールへネパールからまたシンガポールへ戻り、さ

らにタイ、マレーシア、そしてインド、シンガポールを経て大阪へ帰ってきた。

学歴

山口の高校を卒業して大阪の専門学校へ進学した。卒業後、再び編集関係の夜間学校へ通学した。

職歴

専門学校卒業後、21歳の時在学中からアルバイトをしていた撮影の仕事を正社員として始めた。カメラの仕事だったけど、フリーとしてではなく、カメラ会社の会社員として要求されたことに応じる仕事だった。この仕事はむいていなかったの自分ではデザイナー向きではなかったと思った。自分の独創的な世界を作る方が自分に向いていると思った。24歳の時、仕事を変わって染色の仕事についた。それは染色がやりたくて入ったのではなく、朝は早いけど4時45分におわるので夜間の学校に通うことができると言う理由だった。その年卒業してその方面で就職しようと思ったけど学校へ行っているうちに自分の意識が変わってしまった。友達関係も変わってしまった。最初編集方面の仕事を探したけれども、そのまま染色関係の仕事が続いてしまった。27歳の時、正社員でコピーライターの仕事についた。それは半年ぐらいたったと思うが、『誰がやっても変わらない、言われたとおりにやればいいんだ。私という人間を雇わなくても別に他人でもいい』という仕事だった。私は結構仕事好きなほうだと思うが、このときはいろいろあって何もかも嫌になって大阪にいることはできないと思った。自分が思ったとおりの仕事をやってみたら全然自分が思ったことができなかつたと言うショックがあった。全く違う人と会いたいと思って岩手のスキー場でアルバイトをした。3年やって毎年契約更新していた。この間会った友達にインド旅行の素晴らしい話を聞いて自分も行きたいと思った。語学に自信はなかったけれど、自分も行っても大丈夫かなと思って行った。周りにも半年スキーの仕事をして半年外国へ行くという人もいた。その人は定職には着いてないけれど人間としては『すごいなー』と思うし、自立しているし、自分というものを持っているように見えた。このとき、定職はないし、家庭はないし、お金はないし27歳の時全部終わったと思ってしまった。海外に行こう、1人で行こうと思ったのは、この先自分をどうすれば良いのか、自分に自信をつけないといけないと思ったから海外へいった。31歳の時、旅行にピリオドを打って今は派遣会社でコンピューターの仕事をしている。

家族歴

父は現在67歳、母は68歳、祖母は93歳で父は学校の教師だった。母は編物教師をしていた。父は戦時中、学生であった。父は、変わった考え方を持っていて私が外国人、例えば在日朝鮮人と結婚するとしても反対はしないと思う。私が小さい頃から、在日の人々がどれだけ苦労して、大変か話してくれていた。わたしが小さい頃、『あの子、中国人なんだって』というようなことをいったら『そう言うことで人のことを嫌いだとか、好きだと

か言うのはいけない』と諭していた。しかし、母は『そのような人とつきあうな』といていた。

外国人交流歴

30歳の時何にも決めないで、行きと帰りの飛行機のチケットだけを買って、シンガポールに経由で、ネパール、タイ、マレーシア、インドというように旅行を繰り返していた。本当はヨーロッパへ行きたかったけれど語学的能力不足だった。インドやネパールだったら話せなくても大丈夫と思ったことと、生活費が安いということで行く先に選んだ。本当にインドへ行ったのは大きかった。一人で日本人の女の子が歩いていると、いろいろと声をかけてくる。『お金をもらえるのではないか』と思う人、『道案内してやる』人など1日つきあっていると時間が経つ。身の危険も何度も感じたけれど、そのたびにだんだん強くなっていく。最初にニコニコして近づいてきてもお金をくれないとわかって去って行ってしまふ人とかいた。生活費は全然かからなかった。日本は平和でいい国と言われるけれど、平和や自由はその国によって違うこともあると身をもって実感した。旅をして『必要な時に友達は現れる』と思った。私が困った時にこういう言葉で助けてくれたらうれしいと思う時にそういう人がちゃんと現れる。迷っても明日の風は吹くといった旅行だった。旅行にピリオドを打ったのは、最初は『ヤバイヤバイ』と思いながらカチカチになって英語を話すのにビクビクしていたのに、今では相手に伝われば良いやという感じで強気な発言をするようになったのは、自分でも『これはあかん』と思って、心が緊張しなくなると旅行の意味はなくなる。そう思ったのが31の時だった。旅行はずっと行っていたわけではなく、時々行っていたが、向こうで病気していることも多かった。しかしこの旅行はわたしの財産になった。戻ってきてからもインドとかネパールの人と交流するようになった。自分からその国に出かけて行った後向こうの友達と日本に帰ってから会ったりしていた。日本にいる外国人がいろいろ悩みを抱えていることを知って、表面的に付き合うだけでなく、外国人を知れる機会はないかと思っていたらたまたま多文化共生センターで3ヶ月間に渡ってそういう問題を考えるセミナーをしていた。32歳の時だと思う。

多文化共生センターボランティア活動について

会員にはなっていません。多文化共生へいったら情報を得られるから入れと言われていたが入ってない。友達は南米チーム、私は韓国チームに入っている。在日韓国人のボランティアの話も聞きたかったので、1998年の8月から在日韓国民協議会に入っている。キム・デ・ジュン氏が来日する頃、日本の文化が解禁になって向こうでは日本の文化がいっぱい入ってきているのに私達の興味は全然韓国に向いていない人が多い。韓国の文化を私達が伝えていこうという会『ナビ』を友達3人で作った。私は在日の人は在日だし、韓国人の人は韓国人だから同じではないと思う。『ナビ』ではどのくらい日本の若い人達が韓国の文化を知っているかというアンケートをやったのと、日本に来ている韓国人達が私達と

交流を深めて韓国に帰った時に信頼が築けるような掛け橋の役目をしたい。『ナビ』は多文化共生センターとは関係はない。日本に来ている留学生の人の中でホームステイをして日本人があまり世話をしてくれなかったと言っていた。このような文句を言っている人は、日本に対する対抗意識が強かった。『ナビ』では韓国の人を対象としているから在日の人は守備範囲から外れるけど、『ナビ』のグループがいろいろお世話になっている人達は在日の韓国人の問題を扱っている人達だ。在日の人を韓国の方は、よく知らないということも聞く。日本人が『韓国の人達を強制連行したのに日本籍から勝手に外して、何万人かは向こうへ帰って向こうでは裏切り者みたいに言われて大変だった』と言う話を聞いた。だから2つの文化を持っているから独特の文化を持っていると思う。探検隊では在日も韓国人も一緒に扱うけれど、私はできない。在日のおじさんと話すと言教がましいことを言うと言って嫌っている人もいる。1、2世と聞いたらちょっと苦手と思う人もいるけれど40歳代前半ぐらいの3世、4世が守備範囲と言う人もいる。韓国の人に叱られたことはあるが、そのあとは仲良くしてくれる。私を嫌いだから怒っているのではなく、勉強していないから怒っている。これだけ酷いことをしているのになんで教科書にのせないのかとか、在日の存在をないもののように扱っていると言われる。本名をあかしていない状況を日本の教育がそのようにしていると思っている人や本名宣言をしても、全く日本人との関わりを絶っている人、韓国人であることということでさえ臆病になる人にはいろいろなことを聞きづらい。また韓国人の友達がほんとうに私にこころを許しているかという疑問であるところもある。日本人を受け入れるのに臆病になっている人もいるし、日本人と仲良くなりたいと思って仲良くなる韓国人もいる。だからいろいろなこと聞かれてうれしい人と嫌な人がいる。

私自身は、絵、文章、写真をしていたから、自分が中心となって人とのコミュニケーションをとるのは苦手だが、人と人との間を取り次ぐために相談係りになるのは好きである。自分の人生について

充実していたのは、24歳の時、27歳のスキー場で働いていた時と、30歳の時インドへいった時である。しかし27歳から30歳の頃はお金もないし、希望もないしこれからどうして行くのだろうという感じだった。

病気をしたのは、29歳の時で入院した。ちょうどオウム事件が会った頃で、私にとって大きな事件だった。

阪神大震災の時は日本にいなかったので私には影響はないが、震災で人生が変わったという人もいる。

Tさん（20歳女性）

移動歴

大阪から住所を移したことはない。

学歴

府立の農業高校を卒業し、その後酪農ヘルパーとして約2年働いた後、現在は専門学校へ通っている。農業高校3年の時、自分担当の牛を1頭世話をすることになった。その時の感動が今も忘れられない。また全国の農業高校から選ばれてアメリカの牧場体験もした。その時に知り合った農業高校の友達といまでも交際している。

職歴

農業高校の資源動物科を卒業した後、大阪府総合畜産農業協同組合に登録して酪農ヘルパーとして、府内の酪農家の牧場へ手伝いに行っていた。土日はヘルパーを望む所が多い。朝4時から8時まで働いたりして2日働いて18万くらいの給料をもらっていた。すつとこの仕事を続けたかったがぎっくり腰でやめた。しかし牛は好きで『ミルクフレンド』という牧場めぐりに参加している。そこで名古屋の同じようなヘルパー2人と友達になった。現在はカメラ屋さんのアルバイトをしている。

家族歴

父は47歳、母は48歳、姉は22歳である。家は酪農家ではない。

外国人交流歴

農業高校の時アメリカの牧場体験でホームステイをした。

多文化共生センターでのボランティア

11月にワンワールドフェスティバルに参加した。2月に子どもプロジェクトに参加し、中国人小学1年生、上級生、中学生と遊んだ。3月の始めボリビアの女の子2人、日本人の子3歳、中国の子1人と勉強したり遊んだりした。

自分の人生について

最も充実していたのは、高校3年生の時、牛を世話してお乳をやっていた時だった。悩んだのは、中3の時だった。悲しかったのは世話した牛が売られた時と友達が自殺したことだった。自分の転機は農業高校を選んだことだと思う。

Sさん(23歳女性)

移動歴

高校まで岡山県にいて、大学入学に伴って移動した。卒業の時タイへ旅行した。

学歴

大学は国際関係学部で、言語コミュニケーション学科に所属し日本語コースで日本語教師の準備をしていた。大学3回生の時、ダブルスクールで日本語教師養成講座に通った。現

在も日本語教師資格試験受験の準備をしている。

職歴

大学4回生の時、海外で日本語を教える民間学校へ就職したいと言う手紙をタイ、インドネシア、シンガポール、マレーシアと出した。タイから返事があったが、通貨危機のためだめになった。大阪の国際交流センターを通して多文化共生センターを知った。卒業後契約週4回1日1時から9時まで8時間専従で働いている。しかし給料は安いのでパン屋さんに朝7時から10時まで週5回バイトをするほか、土・日曜日はN T Tのインターネットインストラクターとしてのバイトもしている。この4月からは子どもプロジェクト専従スタッフをしてボランティアコーディネートをしている。

外国人交流歴

学生の時、オーストラリアへホームステイした。また韓国からきた日本語学校研修生と仲良くなって、その後韓国へも訪ねていった。中国の人とも仲良くなって家に呼んでくれた。

多文化共生センターボランティア活動について

共生センターの仕事として、大阪市教育委員会へ団体登録する通訳を派遣している。八尾市の教育委員会にも通訳を派遣している。また保母さんの研修会へ講演にも行っている。保母さん達はフィリッピン、ブラジル、中国、アフリカといった国籍の子ども達的生活習慣を理解するために月1回から2回勉強会を開いている。毎週土曜日、ボランティア4人から5人ほどを組織して多文化子ども広場を9月から開いている。ペルー、ポリビア、スペイン、中国など国籍も様々な子が集まっている。

これまでの人生

タイへの卒業旅行は印象的だった。辛かったのは多文化共生センターでの初期のボランティアコーディネートをやる時、自分自身の知識のないことを思いしらされた。転機は日本語コースへ興味を持った時だと思う。

Rさん(27歳女性)

移動歴

住所はほとんど移動していない。大学在学中、フィリッピンマニラへ留学した経験を持つ。

学歴

県立高校を卒業して1年浪人して外国語大学へ入学した。4年の時大阪府から援助を得てフィリッピンのマニラの大学へ留学、大学院の外国語研究科に進学し、99年修了。その後名古屋の国際開発研究科博士過程へ進学する予定。

家族歴

父母とも神戸に住んでいる。妹は就職して3年目で24歳で来年9月に結婚予定。弟は大学生で大学の自治組織に属している。

外国人交流歴・多文化共生センターボランティア活動歴

1995年1月震災直後、設立されたN G O 団体、外国人地震情報センターの主要メンバーとして活躍した。センターでより多くの言語に対応へするボランティアとして地震直後の被災外国人の情報提供と各団体への連絡、相談へのカウンセリングを行う。その後10月ニュースレターの発行などを通して外国人の日常的な生活相談に対応できる『多文化共生センター』へ再出発する時の中心メンバーとして活躍した。現在、『救われる側』と『救う』側の垣根をなくし、共に考え行動するプロセスを重視したプロジェクト探検隊の隊長として1999年まで5回の探検隊の企画、ボランティアのコーディネートをしている。

1995年5月から9月にかけてこの外国人地震情報センターで企画した調査プロジェクトチームで被災外国人への聞き取り調査を行った。また卒業論文として神戸および被災地域におけるフィリッピンコミュニティの調査と被災したフィリッピン人への個別聞き取り調査を実施している。

探検隊プロジェクトのメンバーは絶えず入れ替わる。留学をしたり、外国へ旅行したりする人が多いため、メンバーの顔ぶれは毎年変わる。メンバーの興味とボランティアの内容が一致することは難しく、コーディネートに苦勞する。単純な役割や自分の興味以外のことにもやる気を持ってくれば良いのだが、その辺の役割分担が難しい。

今後は多文化共生のボランティアを続けながら名古屋で大学院生をする予定である。

分析結果

(1) 幼少時の居住地域の外国人との交流

一地域に居住している外国人との交流はこれまでの生活歴の中であったかー

幼少時から外国人との交流があったケースは、在日韓国・朝鮮人、および中国人との交流が多い。Eの場合は近くに朝鮮学校があり友達が在日朝鮮人だった。Hの場合は、高等学校の時、中華学校の卒業生がいて自分の友達だった。Fの場合、高校の時友達のお父さんのお葬式で初めて友達が在日韓国人であることがわかった。友達としての付き合いは変わらなかった。Lの場合は、小学校の時在日朝鮮人だからということで親友がいじめにあってみんなの前で『本名宣言』をすることになった。『みんな、同じだからなかよくしましょーうね』という刷り込み教育には疑問を感じている。その後、自分自身がカナダでアジア人として『言葉ができない』『生活習慣が違う』と差別されて、『みんな、同じである』と、まとめてしまう教育にいっそう疑問を感じている。親しい友人が在日外国人であったことが、在日外国人の立場をわが身に置き換えて考える視点を育て、その後国際交流ボランティア活

動をする原動力になったといえよう。Aの場合は近くに技術研修に来日している外国人家族と小学校時代、机を並べた経験を持つ。

Jの場合は、近所にフィリッピン人が住んでいたが、周囲の人が『あまりかかわってはいけない』といわれたのでつきあっていなかった。Kの場合は、小学校区の約3分の1が韓国籍という子ということ、後で知ったが、小学校、中学校の時在日の友達はいなかった。周囲に在日外国人が住んでいても、日本名で生活していたり、外見が日本人と変わらなければ、外国人と意識しないで友達になっている場合が多い。何かの機会に生活習慣の違いや外国人学校にその後進学したことで始めて『外国人』として意識されるケースが多い。幼少時外国人であることが分かった時も彼ら自身は友達としての関係は変わらない。しかし、その後国際交流ボランティア活動をする中で『在日外国人として日本の中で置かれた立場』を学習するにつれて、その時の友達の心情を察して逆に『日本人の在日外国人に対する知識の無さ』を反省しその頃の友人関係を思い起こすケースも多い。

(2) 地域移動の経験と外国人との交流

ー地理的移動の経験が日本における外国人交流につながったかー

留学により、外国人との交流が始まったケースは、A, B, D, E, K, L, T, S, Rと多い。留学先は欧米各国が多く、DやRのようにアジアへの留学はまれである。しかし、欧米諸国に留学したから欧米諸国の外国人との交流に終始したかという点、そうではない。留学によって、アジア諸国から集まった学生と友達になったりアジアと欧米という関係に目を向けるきっかけが出来て帰国後はアジアから来た外国人との交流に力を入れたケースもある。Eのように、カナダに留学して韓国から来た学生と親しくなり日本の戦争責任や日本が韓国にしたことについて問われたことがきっかけとなって、アジアと日本の関係について興味を持ったケースや、アメリカ留学で自分自身がアジアの一員として差別を受けたLのケースからもわかるように、留学により『外から見た日本人の姿』や『外国人としての自分』に始めて気がついたケースが多い。Dの場合モンゴルへの留学は日本におけるモンゴル留学生との交流へ繋がっている。モンゴルで外国人として特別視されモンゴルの学生の中に溶け込みにくい体験をしたDは、同じような体験をモンゴルの学生が日本でもしていることを指摘している。すべてがスピーディーに進んで行く日本社会の中でモンゴルから来た学生が『冷たい人間関係』に疲れたり、また来日年数の長い学生が『日本人化』して冷たくなっていくことに危機感を持ち、帰国後はモンゴル学生の相談役をかって出ている。Rは、フィリッピンへの留学から、日本におけるフィリッピンコミュニティのサポートを続けている。阪神大震災の時も地元のフィリッピンコミュニティとの連携をして多くの被災者の援助をした。その後はフィリッピンの開発援助に興味を持ち進学をした。多くの大学生がアメリカ、イギリス、オーストラリアなどへの留学を希望して

いるのに対して、今回インタビューしたボランティア達は異なる。留学経験のない大学生 G は中国への留学を予定し、J はブラジルの大学への留学を希望している。彼らは現在国際交流ボランティアとして接している外国人の国の大学を選ぶ傾向にある。

旅によって外国人との交流がはじまったのは、F と、M である。もちろん彼らの旅行もアジアから始まっている。企画されたツアー旅行でないことはいうまでもないが、一見無謀とも思える『行き当たりばったり』式の所持金を使い果たすまでの貧乏旅行であることも二人に共通している。また双方とも、その当時の職を辞して旅にでかけている。旅行というより、旅、『巡礼』といった表現の方が適切であるかもわからない。あえて計画もたてず、帰りのチケットも用意せず旅にでかけることは、彼ら自身の自分に対する挑戦であったり、自分自身のアイデンティティを見つける旅であったと思われる。

F は、仕事場の上司の影響をうけてアジア旅行に出発したのが始まりであったが、「厳しいけれどもこの時しかできない人生の経験」としてこの旅が人生を変える一つの転機と意味づけている。大学受験失敗から就職して1年半と言う時期にこの旅をしたことによって仕事上の人間関係では得られなかった『一期一会』的な暖かい人間関係を体験できたと考えている。F の言葉を借りると『旅行しているうちになんとかなる』、『旅行している内に現地の人達に助けてもらったことがいっぱいあった』『困りはてていたら若いおねえさんやおにいさんが声をかけてくれた』といったように旅行先の現地の人に対する純粋な信頼感がこの旅を支えていた。その後の彼の友達関係はこの旅の経験によって変化している。損得づくの人間関係から切り離された友達関係を彼は人間関係の中心として考えるようになっていく。

M は、大阪での人間関係に疲れ『定職はないし、家庭はないし、お金はないし27歳の時全部終わったと思ってしまった。この先自分をどうすれば良いのか、自分に自信をつけないといけないと思った』と考え、旅に出ている。そしてその旅において、M の言葉によれば『お金目当ての人は去ってってしまう』『必要な時に友達は必ず現れる』、『迷っていても明日の風は吹く』式の現地の人に対する信頼感を得ている。また自分自身の状況打開力をも試すことができた旅としての意味づけし、「この旅行は自分自信の財産」と位置づけている。この二人にとっては、旅の意味は自分自身の発見と定着したこれまでの人間関係にとらわれない人間自体のやさしさの発見であったといえよう。山折によると、「漂泊、遊牧の精神構造のようなもの、それは乞食の精神だということになりますが、そういう遍歴、漂泊の精神が、初めて近代社会の作り出した差別の構造を相対化できるのではないですか。そういう相対化への願望が、現代都市人達の間にしだいにきざしはじめていくといえる」と述べている〔巡礼の構図、1991、p69〕。F も M も旅をしたいという願望は、これまでの自分の人生すなわち定着した人間関係からの解放されたいと思った時に生まれている。旅で得た自分の体験をもとに、F は日本において切符を買う時など困っている外国人を見か

けたら、言葉はわからないけど『助けてあげよう』としている。またMも帰国後、旅先で親切にしてくれたインドやネパールの人達のことを思いだし日本に在住しているこれらの国々から来た人々と親しく交流している。日本にいる外国人がいろいろ悩みを抱えているのを知って表面的につきあうのでは無く、外国人を内面から知ろうと国際交流ボランティアに参加している。これまで見えなかった日本社会のなかでのマイノリティーへの差別が、山折がいうように、旅によって相対化されその後の国際交流ボランティア活動への原動力になっている。

移住することによって、外国人との交流の糸口が開けたのはBである。Bは親の海外赴任に同行したにもかかわらず、親から離れて生活し現地の家庭で下宿して生活している。一人で自立した生活をすることによって、日常生活の中での様々な場面でバルセロナの人々の外国人へのやさしさに触れて、その体験が現在のBの大学での専攻選択に繋がったり、ボランティア活動や進路選択にも関係している。例えば、市場での買い物の場面でも微妙な表現で苦労していると助けてくれた体験や、高齢になっても外国人の自分を娘のように受け入れ自立した生活をしていた下宿のおばあさんとの関係は、現在の外国人との交流の基盤となっている。帰国子女と言う立場でありながら、親のサポートから離れて初めて自立した生活を送ったと言うことと、その場所が海外であったということがバルセロナでの生活を特別な体験として意味づけている。先の事例調査で海外生活を送った年齢は異なるが帰国子女を対象としてインタビュー調査を実施した。調査結果からは海外における現地友人関係をその後のどの程度維持するかは、その後のライフコースにおける国際性に影響していた。同様にBが高校の段階で得た現地の人達との日常生活場面における直接の交流は、その後のBのライフコースへの大きな影響力をもったと思われる。

Cはワーキングホリディーをオーストラリアで経験して、『外から見られている日本人の姿』に愕然とした。自国では紳士であろう日本人男性が外国に出てあまりにもマナーが悪いので同じ日本人であることを自ら恥じている。そのようなことを見聞したからこそよけいにCはオーストラリアの同僚と働く職場環境に魅力と心の安らぎを感じている。このような体験が、その後Cが帰国しても外国人との交流に拍車をかけ相談にもなるきっかけになった。

留学、旅、移住、ワーキングホリディーなどの地理的移動は、単に身体的空間移動によって異文化に触れる機会にめぐまれるということだけでなく、自分自身が所属していた集団を一時的にでも離れて、外から集団規範や自分自身の生き方を見つめなおす機会にもなるということが事例からみてとれる。

(3) 地位の変化と外国人との交流

—地位の変化は、国際交流ボランティア活動のきっかけとなったか—

Aが国際交流ボランティアに参加するようになったのは、離職して結婚した時である。Aも述べているように結婚によってこれまでの友達と別れ、はじめて関西地域に住むことになったが、一時関西の雰囲気になじめなかった時期にボランティアを始めることになった。またJは、大学に社会人入学は果たしたが、編入してすぐには年齢のこともあって同級生のグループの輪に入れなかった時期に、ボランティアを始めている。Tは、憧れていた牧場ヘルパーの仕事についたものの腰の痛みから離職した直後にボランティア活動に入った。他のボランティアメンバーも留学、旅の後にボランティアに参加した者が多い。職業上の地位の変化や、家族関係上の地位の変化、生活環境の変化はボランティア活動のきっかけとなっている。

Aの言葉を借りると『現在住んでいる関西は外から来た人には暮らしやすい地域ではない』とA自身が受けた『よそのもの』としての痛みが、その後の差別された人々への共感となってボランティアに結びついている。Aはこれまで友人と思っていた人が、被差別地域の解放運動に距離を置くのを知って失望したり、在日韓国・朝鮮人への差別に憤慨したり、国際結婚した友達夫婦に対する地域社会の冷たい視線に対して問題を感じたりしている。これまでの人生では経験しなかった差別の実態を実際に見聞きしたことも、ボランティア活動への目覚めに繋がったが、それ以上に自分自身が体験した『周辺人〔外〕としての意識』がボランティア活動に拍車をかけたと思われる。

Jは、短大卒業後職場の中で学歴差別を経験し、4年制大学へ編入という道をたどったが、実際に大学に編入しても学生としての仲間意識を持てなかった。本当の友達ボランティアグループだと言う。同じクラスとか、出席番号で分けられたグループは、卒業までしか関係は続かないが、ボランティアのスタッフは同じことを目指す同士だから一緒にいて楽しく、アットホームでこのメンバーでないとボランティア活動はやっていけないと考えている。Jは、小さい頃から親の決めた進路を歩かされてきて高校の時登校拒否をした経験を持つ。中学校の時、「友達はいないのではないか」と中学校の先生から指摘されたこともある。Jはボランティア活動に加わることによって周囲からのあまりにも決められた人生から抜け出して、自分で選んだ自分をほんとうに必要とする人間関係にめぐりあえたのではないだろうか。ダンスを通じて得た南米の友達との関係も同様に自分自身で開拓した人間関係である。彼らは、Jの南米に対する認識不足も躊躇なく正してくれたし、日本社会で冷たく扱われた経験をあげすけに話してくれる心通い合う人間関係である。Jいわく新聞や人に聞いたりして持っていた既成のイメージ例えば南米に対して『なんか貧しくて汚い村が多いというような暗いイメージ』から、実際にブラジルと友達になって『苦しい生活を送っていてもみんな集まって突然踊り始めるような明るいイメージ』に変化したという。小さい頃から習い事ばかりの生活で親の期待や周囲の視線にさらされてきたJにとって、ボランティア活動や南米の友達との交流は既成の価値観から解放される転機となったと思わ

れる。

Tは高校時代から目指していた牧場のヘルパーに就職したが、体の不調で辞めざるをえなくなってしまった。生きがいを感じていた仕事だったがゆえに挫折感も大きかったと思われる。だからこそ自分を必要とされる活動に加わりたいと言う気持ちからボランティア活動を始めたと思われる。

地位が変化すると、今まで属した集団の外から自分自身を見つめる機会も生じる。その結果、縛られていたこれまでの役割関係から解放される。地位の変化した時にボランティア活動に出会い参加して新しい人間関係の中で充足できる自分を見出した人も多い。特に異文化交流を目的とする国際交流ボランティアであるからこそ、日本社会を外から見る機会を得ることができたともいえる。

(4) 家族の外国人への風評と外国人との交流

—家族における外国人に対する風評は、ボランティア達の
外国人交流にどのように影響したか—

ボランティア達の年齢コーホートは、20歳から33歳、彼らの父母は戦後生まれが多く、戦争体験を持たないものが多い。最高齢のHさんの父で10代前半、母は疎開経験を持つ。ほとんどのボランティアは、父母から戦争体験を聞かされた経験をもたない。

しかし祖父母の世代となると、Aのようにエトロフからの引き上げ者という人もいる。中国語、ロシア語が堪能である家族が身近にいて、しかも常時留学生の受け入れを積極的にしていたAは国際色豊かな家庭で育ったといえる。Bは父の会社の仕事関係は海外経験者が多く、家族で渡航する以前から外国人の訪問も多かった。またスペインへの海外赴任は家族で海外生活を体験することとなった。また、Mの場合のように父が在日朝鮮・韓国人がどのように差別を受けてきたか小さい頃から聞かされ、差別を許さないように教育された。このような家庭環境は今回のボランティア達のインタビューでも少ないケースだ。そんなMの家庭でも母は、父とは違い、在日外国人とは付き合わないようにAにアドバイスしている。Eの母は、朝鮮人学校の教師と友人関係にあったので、Eは小さい頃から在日朝鮮人と幼友達であった。しかし父は在日外国人には距離をおくように言っている。このように国際交流ボランティアの家庭環境が特別に外国人に対して寛容であったケースは今回の事例では少ない。

一番多いのは外国人に関して全く話題にも上らないケースだった。このような状況は一般大学生と同じである。Kのように地域にたくさん在日韓国人が住んでいても彼らと交際しなかった。在日韓国人ということを知らなかったから交際していてもわからなかったケースもある。Lのように親友であったけれども日本名で生活していたから在日朝鮮人であ

ることが本名宣言によって初めてわかったと言うケースもある。Fの場合のようにあからさまに父母が韓国人を嫌っていて韓国へ彼が旅行することさへ止めているケースは稀である。しかしボランティア達へのインタビューによって見え隠れしているのは、在日外国人について『全く話題にも上らない』ということは、くしくもEの言葉にあるように『父は、韓国人に対して一般的偏見を持っていて、それほど根強いものではない。』といわせるような在日外国人に対する『距離感』のようなものである。しかしこのような在日外国人に対する『距離感』を持った家庭に育ったから、ボランティア達のその後の外国人交流に負の影響があったかというところではない。彼らの旅、留学などの経験がこのような家族の暗黙の外国人交流に対する否定的な考えに影響して逆に彼らから家族に意見をほど大きな影響を与えている。

(5) 学校における人権教育と外国人との交流

一学校における人権教育は、現在の外国人との交流に
どのような影響を与えているだろうか

関東と関西では同和教育や、外国人に対する人権教育に濃度差があるように今回の聞きとり調査においては思われる。ボランティア達の出身は関西が多いが、A,E,Hは、関東出身であり、この人達のインタビューからは同和教育や外国人の人権などについての話は得られなかった。しかし関西に住んでいても、実際に住んでいる地区に在日外国人が少ない場合は、Dのように、在日外国人が強制連行されたビデオの視聴などの歴史的授業が1時間というように人権教育も活発でない。またGは、関西に住みながら同和や外国人の人権に関しての授業はなかった。戦争に関しても学習しなかった。しかしKのように同和地区や在日外国人がたくさん住んでいる所に隣接していれば、人権教育の時間は多かったようである。同様にLの場合も同和教育、人権教育がさかんに行われ、Lの場合は実際に小学校時代、級友の『本名宣言』も経験している。

大学に入って初めて人権教育に出会い新鮮さを感じたのは、これまでまったくこのような教育に出会わなかったGである。南京大虐殺や太平洋戦争について講義で聞いただけでなく、自分自身がテレビ番組のレポーターと言う役割を得て、実際朝鮮学校を見学したり直接在日の人にあたりしてより一層興味をかき立てられた経験を語っている。しかしGのように在日外国人にスポットをあてた授業は大学教育の中でさほど浸透しているとはいえない。むしろEのように、国際理解という名目の講座では欧米系の外国人を対象とした授業の方が多くはないだろうか。留学して外国の大学で学生と交流する中で自分自身のルーツとしてのアジア、そして隣国に対する興味がわいたEのようなケースは稀ではない。

このような教育の中で繰り返し強調されていることは、Lが疑問を呈しているように、『みんな同じだからなかよくしようね』という言葉やIがもらったプリントのように『在日とわかって友達として自然に付き合う』という『違いの無視』である。『みんな同じなのだろうか』というLの疑問は当然である。いままで日本人と思っていた親友の『本名宣言』は、『日本人と異なる文化を持っている』という表明であった。勇気ある表明をしたにもかかわらず、差を否定して同じという括弧でくくってしまうことに疑問を持つのも当然であろう。Fの体験のように、クラスメイトのお父さんのお葬式でチマチョゴリを着た友人を見てはじめて在日韓国人であったことがわかるケースもある。『違う・異なる』ということプラス志向で受け止めて人権教育がなされなければ、その後の人生の中での外国人との交流で躓くことも多いのではないだろうか。実際Fのケースは、同じ職場で在日の人と日本人との間で生活習慣の差から人間関係にヒビが入っている。

FやMの言うように、隣国に対する若い人々の興味はむしろ日本人よりアジアの人々の方が高いかもわからない。また在日韓国・朝鮮人の歴史や日本社会の中で置かれている状況に韓国の若者が疎いというなら、日系ブラジル人の歴史や日本社会に働きに来て置かれた環境にそれ以上に日本人は疎いといえよう。Kは中国から来た高校生によって『日本は中国の隣であるから、中国語を小さい時から勉強しているのではないか』という疑問を投げかけられている。Kは、『中国でも日本語より英語を勉強しているように日本でも英語が第2外国語語として通用している』と答えている。英語はアジアでも通用する言語であるが、万能というわけではない。ビジネスとしての『有用性』、『共通』性にこだわって英語教育に力を入れ、アジアから遠ざかった日本の国際理解教育のひずみは、日本に永く住んできた永住権を持つ在日外国人に対しても、アジアから新しく日本に入国し働く外国人に対しても大きなしわよせを与えたのではないだろうか。

(6) 友人ネットワーク形成と外国人との交流

ーライフコースにおける友人の比重が大きいほど外国人との交流に積極的であるかー

どのボランティアのケースでも友人関係に大きな比重を置いている。大学進学後、地理的移動によって家族から離れて生活の自立を遂げた人が多く、またその機会に友達関係の再編を経験した人が多い。就職している人も職場の人間関係とは別に自分と問題関心を同じくする同志ともいえる仲間集団に以前から所属していた人が多い。外国人と交流に積極的な人は、新しい友達関係を創る力を持ち、また所属している集団に埋没することなく複層的な人間関係の中で自分自身のアイデンティティを見出している。

例えば、Eは東京から関西の大学へ進学ということで、新しい友達関係の再編を経験している。東京の友達から関西でのイメージを悪くいわれながらも、そのようなステレオタイプを逆手にとって『関西弁を話せるようになりたい。関西の大学で大学生活を経験した

い』と新しい友達関係に積極的である。東京の進学高校での友達関係は進学した大学の評価に左右されるような表層の関係であった。だから、新しく入学した大学の友達にも自分が一浪して、知名度に欠ける大学に入学したことを話せなかった。学歴社会の中で偏差値によってランク付けされた評価にこだわっている自分の気持ちは、在日韓国・朝鮮人が自分自身のルーツを明確にしたいとできなくて通称名で暮らしている気持ちとどこか似ているとEは分析している。日本社会における階層関係に組み入れられた在日外国人の生活と、学歴社会における偏差値に影響された学校における友達関係をなぞらえたEの指摘は鋭い。Eは、外国人との交流によって所属する集団の規範に絡めとられていない真の自分自身で開拓した友達関係を得た。

Kは、職安の行政側担当者として立場上外国人を相手に仕事をするのが多くボランティア活動との接点も多い。中国残留の少年やインドシナ関係の事例を職場で公務員として扱うと同時に、ボランティアでは子どもプロジェクトとして中国の高校生に勉強を教えている。彼は『行政は冷たい』という風評を彼は担当者の温度差の問題と分析している。職場の担当者が辞令で担当が決まるのに対して、ボランティアの方は自分自身の興味関心もあって最初から積極的であるという違いが、外国人との対応差、すなわち温度差にでると考えている。そういうKは新しく赴任した上司をボランティア活動に誘っている。このようなKの職場における外国人との交流と、ボランティアにおける外国人との交流は複層的な人間関係をなしているといえよう。職場における人間関係を、ボランティアにおける友達関係からの視点で捉え直すことによって、またボランティア活動における壁も行政側の情報を活用することによって解決できるという双方の連携に期待している。

Fの場合も外国人との交流、旅への関心は職場の上司のアドバイスによって始まっている。職場の人間関係が、このような幅を持つことによって狭い職域から個人を解放し、職場における上下関係を度返しした個人と個人との平等な友人関係にまで広がる状況がすでに日本でも始まっていると思われる。

ボランティア活動の意味を友達作りに見出している人は多い。ある意味でボランティア達は、損得関係や既存の価値観に左右されない人間関係に飢えている人々の集まりとあってよい。ボランティアというイメージから『善意を与える人々』というイメージがあるかも知れないが、インタビューを終えた彼らの言葉からは、ボランティアこそ、外国人との交流によって新しい友達関係、新しく自分のライフコースを進んで行くための羅針盤を得たという『与えられた人々』のイメージが感じられる。もちろん自分自身の価値観がボランティアをしているけれどもぐらついていて、ライフコースの羅針盤を得ていない人もいる。Iは、学生という地位から職業人という地位への移行が受け入れられず、せっかく決まった職場を去ってしまった。現在は表面上就職活動サークルに入って就職を探しているように見えるが、実際はサークルの中での人間関係やボランティア活動における人間関係

に安らぎを得ている状態である。自分自身ライフコースの方向性はいまだ見えずの段階にある。それは他のボランティアとは異なり、Iのボランティア活動の動機が、『自分自身の感情を出す訓練として国際交流ボランティアに参加する』という一方的なものであるからではないだろうか。ボランティアという名を借りてサービスを受けることばかりを期待し、自分自身からの働きかけを忘れた場合はいつまでたってもライフコースの羅針盤となるような友達関係は築くことはできない。自ら自主学习グループを作ったEやMのような積極性がみられないIは、ボランティア活動でも周皮的であるし、満足感が得られていない。国際交流ボランティア活動では、外国人との交流を通じてサービスの交換が行われている。外国人がボランティアとの交流によって得るサービスは電話相談や子どもプロジェクトによる情報の提供、さらには日本における心を打ち明けられる友達関係であるとすれば、ボランティアは外国人との交流によって、外から自分自身のライフコースを見つめなおす機会を与えられるとともに、同じ目的を持った友達関係ができるというサービスを得ている。

(7) マイノリティー交流経験と外国人との交流

—他のマイノリティーグループとの交流経験は、
外国人との交流にも影響を与えているか—

ボランティア活動に参加する前から国際交流以外のボランティア活動に参加していたのは、HとE、Mであった。Hは大学で出会った廃寮反対運動の渦中で地域運動や学生運動との接触があった。在学中、これらの運動を通じて、京都のYWCAの外国人相談窓口でのボランティア活動や横浜の外国人労働者支援の会『カラパオの会』に参加、さらに釜が崎の越冬支援の会に加わったようにマイノリティーグループの援助活動に積極的に関わっている。

Hがこのような運動にかかわっていくのは、大学における廃寮運動から始まる。学費が払えない学生にとっての寮の意味を問う運動によって、大学側や地域の問題点が見えるようになる。そのことによって、社会の仕組みからはじきだされた人々の生活に関心が行くようになる。Hは、現在でもホームレス達の集う町コトブキに魅力を感じて盆と暮れにはかならず訪れ、町の人々と共に迎える休日に安らぎを感じている。Hは、大学卒業後、大学の事務職員として就職しているが彼によるとこの職はあくまでも期限つきの仕事で彼本来の目指した仕事は、やはりマイノリティーに関わる仕事であるという気持ちを強く持ち続けていた。Hのライフコースは、H自身も認めるように『カラパオの会』に参加した時点から大きく変化している。Hは、コトブキで出会うホームレスや外国人労働者達に対して、『自分もいずれこうなるのではないか』という気持ちまで持っている。永久就職というルールから外れた場合、次のルールの掛け方がわからないような日本のサラリーマンにとって、ホームレスや外国人労働者が今置かれている立場はまったく無縁なものではないと、Hは結論づけている。

EやMは、多文化共生センターにボランティアとして参加する前に、在日韓国・朝鮮人を中心とする団体に加入し、韓国の文化を日本の若者伝えて行こうという『ナビ』というグループを作っている。Eの場合は大学院で在日問題を専攻したというきっかけであった。Mの場合は旅をして日本に帰ってきて日本に来ている外国人と付き合ううちに日本にいる外国人の悩みをいろいろ聞いたことがきっかけであった。EやMの場合はこの在日韓国・朝鮮人を中心とする団体『民団』に参加する内に在日外国人として彼らが、自分達の置かれた状況、差別されている状況は自分達から運動をおこして変えていかねばならないという在日の人達の意識改革運動を知る内に日本人としてこの運動をサポートするだけでなく、変わらなければならない日本人の方であることに気づき日本人の意識改革も共にしようということからグループを結成している。日本人の意識改革ということならば、在日外国人を韓国・朝鮮人に限らず、ブラジル系や他の国籍の人に対する意識改革も考えたいということで多文化共生センターに参加している。

H,E,Mなどの他のマイノリティー援助グループとの関わりは、現在の多文化共生センターの活動に大きな広がりを与えている。多文化共生センター自体の歴史が、震災時の他の外国人支援団体との連携から始まっているということにもあるが、ボランティア一人一人の他のグループへの関わりもこの連携の絆をさらに強化している。

まとめと今後の課題

幼少時地域に居住している外国人との関わった経験はその後の外国人との交流に大きな影響を与えている。幼少時、近くに外国人が居住していながら交流がなかったケースでも、その後の留学や旅、ボランティアへの参加によって外国人との交流が始まりそこから得た体験によって幼少時の地域や家族の風評を思い起こし在日の外国人に対する理解のあり方を再定義しなおしている。

家族が外国人に対して積極的に負のイメージを加えたケースは少ない。しかし近くに外国人が住んでいながら、『距離感』を持って生活していた様子は覗える。そのような家族の外国人に対する『距離感』は、息子や娘が外国人との交流に力を入れるようになると『かかわるな』とか『深入りするな』といった言葉で示めされるように暗黙の外国人との交流を否定し始める。特に欧米の外国人との交流には寛容であるが、アジア系の外国人との交流には家族からストップがかかるケースが多い。ボランティアの家族の年代コーホートは戦争を体験した世代ではないが、戦後まもなくの時代に少年時代を送り在日外国人の歴史や人権の問題について十分な教育が行われた経験がないことも影響していると思われる。しかし彼らの子どもの世代になってすなわち今回インタビューしたボランティアの世代となって、外国人の人権に対する教育が進んだかということ、今回の事例からは確認することはできなかった。ボランティア達が家族の暗黙の反対にもかかわらず異文化交流ボランテ

ィアに参加したきっかけ要因となったのは、彼ら自身の留学や旅、海外移住、ワーキングホリデーといった地理的移動に伴う異文化体験による影響が大きい。

地理的移動は単に外国人と接触したという体験を彼らに与えただけではなく、移動によって一時的に所属していた集団を離れ外からこれまでの自分のライフコースを見つめなおす体験を与える。このような旅や留学への決意は、地位の変化に伴って行われたケースが多い。地理的移動にいたらなくても、転職や編入学などのライフコースの転機に国際交流ボランティアになったり、在日外国人と交流が始まったケースも多い。地位の変化によっていままで縛られていた役割関係から解放され、新しい役割関係の再編を経験することによってこれまで見えなかったマイノリティーの置かれた立場に共感を持ち国際交流ボランティアに参加することになったケースもある。

彼らのボランティア活動は外国人との互恵的な相互作用から成り立っている。外国人に対してボランティアとして、電話相談や子どもへの日本語指導に携わるサービスを提供したり、日本人に対して外国人が日本において置かれている状況を理解する講座やフィールドワークをしたりしている。そしてボランティア達は外国人との交流によって広い視野で自分自身のライフコースを見なおすことによって新しい人生観を得たり志を同じくする友人ネットワークを持つことによって人生の岐路を乗り切る力を与えられる。このような力を得たボランティア達は国際交流ボランティア活動に留まらず、社会的に弱者の立場に置かれている人達すべてに目をむけ活動を拡大しているケースもあった。

学校における人権教育は、20歳から30歳代のボランティア達にはあまり影響を与えていなかった。むしろその後の彼ら自身が体験した外国人との直接の交流こそが、かれらを国際交流ボランティア活動のきっかけとなったと言える。留学や海外への旅、ワーキングホリデーなどの機会は現在若者にはたくさん用意されている。しかしその行き先のほとんどが欧米の先進諸国に限られていることは、平成9年度のアンケート調査で明らかにした。今回の留学や海外旅行などを体験したボランティア達は、むしろ海外で自分達が外国人という立場になって初めて日本で外国人がどのような立場に置かれているか、外国人ということでのどのような待遇を受けているかということに思いをはせている。一方現在、在日1世、2世、3世と呼ばれる人々、近年増加しつつある外国人労働者と呼ばれる人々、国際結婚の相手として選ばれる人々はアジアや南米諸国出身が多い。今後地域社会の中でこのような人々と共生を考えるには、日本における在日外国人の歴史、置かれた法律上の立場、労働をめぐる状況に関する学習も重要であるが、実際に在日外国人との交流を中心としたフィールドワーク学習がもっと行われることが必要である。

今回の国際交流ボランティア達のライフコースは、転職や大学への編入などの経験を経た者が多かった。このような一見回り道とも思えるようなライフコースを歩んで来たからこそ、異質な文化や自分達が所属する集団以外の人々への目配りが可能であったとも言え

る。従来の日本人のライフコースは、小学校、中学校、高校と学歴を順調に進み、定職というように一つの会社に永年籍を置き、年功序列によって給料が保証されるようなライフコースがマジョリティーを占めていた。しかし経済の進歩が鈍化するに従って、また外資系企業の進出によって能力給が普及するに従って、個人の能力の評価やよりよい評価をもとめて転職をしたり起業したりする機会が増えてきている。ボランティア達の中にも、『自分は組織にからめとられたくない』という気持ちで安定した職を去り、自分の夢を追求するためボランティア団体の専従という不安定で低い給料である職を選んだ者もいる。手堅い生活設計をすることよりも、成功や失敗を繰り返しても自分の力で生きているという実感を大事にしたい者もいた。家族や職場の人間関係といった比較的長期間の安定した関係に自分の居場所を求めることから、いつ自分から去っていくかわからないが自分と志を同じくする仲間にもまれて一時的にでも生活したいという人達が多かった。安定し保証された生活を一時的にも離れ充電期間を言う名で自分自身を発見する機会や、自分と異なる文化を発見するゆとりが必要なのではないだろうか。

今回の国際交流ボランティアのライフコースを聞き取り調査をしていて思い起こしたことは、昨今の若者の四国遍路や霊山や聖地への巡礼、アジア放浪旅行のブームである。安定という名のもとに親や学校からの期待が大きく窮屈なレールが早くから設定されるほど、充電期間というゆとりへの渴望が生まれる。同時にこの充電期間に全く異なった文化の中に身を置き新しい人間関係を発掘したいという衝動が若者の中に起きているなら、若者の巡礼と国際交流ボランティア活動はこの衝動の癒しの方法として選ばれているのではないだろうか。

この調査研究は1999年度文部省科学研究費萌芽的研究の補助を受けたものである。

引用文献

山折哲夫他、1991、『巡礼の構図』、NTT出版

外国人地震情報センター編、1996、『阪神大震災と外国人』、明石書店